

囚われの身、囚われた生活



非占領地パレスチナにおける、
軍事占領、トラウマ、排除という暴力

Military Occupation, Trauma and the Violence of Exclusion:

Trapped Bodies and Lives

By Nadera Shalhoub-Kevorkian, Ph.D.



■もくじ■

謝辞	…3
はじめに	…4
概念的枠組	…6
エルサレムにおける政治情勢の変化:その現状	…10
調査方法	…17
データ分析	…19
1) 迫害と囚われの体験	…23
2) 経済的な囚われ	…26
3) 空間の政治:囚われた空間と場所	…31
4) 社会支援ネットワークの崩壊	…33
5) 手段と抵抗	…35
6) ジェンダー化された捕囚状態と抵抗活動	…38
結論および方策の提案	…42
参考資料	…45

■謝辞■

イスラエル占領下にある東エルサレムに住む、一人ひとりのパレスチナ人の生活に何が起きているかを知りたいと思う方は、この調査報告書をぜひお読みください。「ジェンダーの主流化とトレーニング」プロジェクトを開始するため、ダン・チャーチ・エイドに支援を依頼するにあたっては、ジェンダーやジェンダー関係、また社会政策に関わるさまざまな要素について、研究者に調査を委託し支援するというのが、このプロジェクトの核をなしています。この調査報告では、上記の課題を取り上げ、取り組んでいくために、啓発や公の議論、および各方面の関連する主体による積極的参加の推進を目指しています。

パレスチナの DCA 代表であったファディア・ダイベス博士に感謝申し上げますとともに、このプロジェクトと、提案された調査のアイデアに対して博士からお寄せ頂いたご支援に謝意をお伝えできますことは、私にとって大変な名誉です。ただ、報告書を手にも語り合うべきファディア博士が今ここにいらっやらないことが悔やまれます。博士の死を深く悼み、この報告書を追悼のしるしとして発表できますことを、光栄に思います。

この報告書は、調査チームのリーダー兼報告書の著者であるナデラ・ケヴォルキアン博士と聞き取りチームによる、およそ 1 年半におよぶ協働の成果です。聞き取りチームのリーダーはサナ・クセイボウンさん、メンバーはアイリーン・クタブ博士、メイ・アミレさん、そして私でした。

2008 年の半ば、ナデラ博士と調査の構想に入った時、この調査は単なる思いつき、希望、あるいは夢に過ぎませんでした。しかし、博士と何度も顔を合わせ、議論を重ねた末に、この特定の調査を開始する決断をしました。

ナデラ・ケヴォルキアン博士のような、創造力にあふれた類まれな研究者に恵まれてこそ、一貫した指導のもとで調査が進められ、調査結果と聞き取り内容の考察を経て、人間の生の声(ヒューマン・ストーリー)としての説得力ある報告書が完成したのです。博士は、現地調査の方法を熱心にご指導くださり、また自ら調査に没頭されました。博士より賜りましたご尽力、ご指導、見識、また専門的見解や判断に感謝しております。

この調査報告書は、自らの体験を話して下さったすべての男性、女性と共にした長い旅の終着点です。これらの人びとは実在し、この本で書かれているように毎日を苦難の中で生き、暮らしています。調査チームが話を聞こうと近寄ると、彼・彼女らは自らの体験を熱心に語ってくれました。そこには、いつか誰かが自分たちの抱える不平に耳を傾けてくれ、いつの日かこの苦難に終わりが訪れるようにという願いがこもっていました。しかし、体験を口にするのはつらい旅だったはずで、なぜなら、「囚われ」の日常が思い起こされるからです。

最後に、YWCA のハナン・カマルさん、アーダ・アガザリアンさんを含め、この報告書の最終校正から編集、印刷をお手伝い下さったすべての皆さんに心からお礼を申し上げます。

パレスチナ YWCA 総幹事 ミラ・リゼック

まるで、罨の中で暮らしているようです。夢見ようとする、こんな言葉が思い起こされます。「いいか、忘れるな。おまえたちはパレスチナ人だ。だから、夢見ることなど許されないのだ」抵抗し異議を唱えようすると、全世界からこう告げられます。「おまえの人生はパレスチナ人の苦しみだ。おまえの家族の歴史は、世界の記憶に刻まれてはいない」私はどこにも存在していません。私にはパスポートがありません。今いる場所を出て旅することができません。健康保険がありません。私がここで死んだら、死亡診断書はたぶん必要ないでしょう。いずれにせよ、私が死んでも誰も悲しみません。私たちは虫けら同然です。人間の格好をした虫です。

メイ (May) 東エルサレム出身 24 歳女性

死者となっても占領者からは逃れられません。バブアルスバ (Bab al-Sbat) (パレスチナの墓地) で死者を埋葬しようとする、誰のお墓を掘っているのか、亡くなったのは誰か、そして埋葬に関する書類を調べに占領当局は必ずやって来ます。時には書類のチェックに 1 時間待たされ、それが終わってからようやくお墓を掘る作業の再開を許されます。

サミル (Samir) 東エルサレム出身 23 歳男性

■はじめに■

この報告書は、イスラエルによる暴力がエルサレムに住むパレスチナの人びとに及ぼす影響、および、排除、恐怖、迫害、政治的残虐行為、そして絶え間ないトラウマなどの暴力について検証するものです。このような調査から、ジェンダーや民族を根拠にパレスチナの人びとの生活に侵入する軍事占領の「日常性」が浮き彫りになることが望まれます。軍事占領という暴力が、その時間・空間・場所において暮らしている女性たちや男性たちの生活に及ぼす破壊的影響力を考えると、先ほど引用したパレスチナ人女性の言葉どおり、世界がその暴力を認知しないことと合わせ、パレスチナの人びとに加えられるこのような暴力の日常性は特にゆゆしき問題であるといえます。植民地化された女性、植民地化され危険な存在となった男性、そして文明を持つ欧米人という、連綿と続く多くの問題をはらむ三角構造に注目することで、世界的な抑圧やエルサレムでの民族差別と軍事占領の日常性に耐えて生きる人びとと、不当な構造を打ち立て弾圧をおこなう者とを隔てる障壁に挑むことができるかもしれません。

紛争地域、ここでは占領下の東エルサレムに住む女性と男性そして子どもに対する、世界的・地域的排除という暴力を理解するため、特に、フランツ・ファノン (Frantz Fanon) の、占領地に関する地政学的分析や、アチール・ムムベ (Achili Mbembe) とシェレン・ラザック (Sherene Razack) のネクロポリティカルな分析 (necropolitical analyses)¹¹ などをよりどころとしました。このような理論家たちは、パレスチナの人びとの身体的安全と生活を排除する政治を構築するために生み出された、実際の行為としての、また認識上の暴力の解明に貢献しています。

¹¹ ネクロポリティカルな分析 (necropolitical analyses)：ムムベは、現代の世界はネクロポリティクス (necropolitics) によって特徴づけられると示唆する。現代の世界では、人格を極限まで破壊し、人びとが集団で「生ける屍 (the living-dead)」のような状態に置かれるような、新しく特殊な社会状況、すなわち「死の世界 (death-worlds)」をつくり出すために武器が配備されていると、ムムベは考える。ムムベにとって現代のパレスチナに対するイスラエルの占領は、そのような「死の世界」のひとつをつくり出していることを意味する。(Sherene H. Razack, *Casting Out: The Eviction of Muslims from Western Law and Politics*, University of Toronto Press, 2008 より抄訳)

パレスチナの人びとに対する、排除や軍事占領、トラウマなどの暴力を、政治や歴史および世界から切り離して検証しようと試み、同時にこのような暴力の重大性を認めないで、この暴力を完全に「安全保障」や「テロ」および「文化」の範囲のみに入れてしまうことは、はなはだしい見当違いであるうえに危険です。

本文は、イスラエルによるエルサレムの占領と、アラブ・エルサレムで占領を生き抜こうとするパレスチナの人びとの苦闘を背景としています。現地調査の中心は、大きな感情的・政治的重要性と象徴性を持つエルサレム市に置きました。

東エルサレム、ヨルダン川西岸、ガザ地区から成る被占領パレスチナ地域 (OPT: Occupied Palestinian Territories) は、地域全体の政治情勢から生まれた、長期にわたる複雑で痛ましいトラウマのプロセスに直面してきました。人びとエルサレムには、深いトラウマをもたらす政治的意味合い、ならびに霊的・宗教的な意味があり、同時に、回復や試練への抵抗といった意味合いもあります。占領や併合、またエルサレムに住むパレスチナの人びとが住居を奪われる過程などの長年にわたる歴史的経験が、エルサレムにおける、場所、空間、アイデンティティ政治²、国籍、ジェンダー構造の間の関係すべてを規定してきました。

本文は、エルサレムに住むパレスチナの人びとが、占領を生き抜く毎日の行動をどう感じているのか、また、彼ら・彼女らが、イスラエルによるガザ地区攻撃 (2008 年 12 月 27 日から 2009 年 1 月 18 日まで) 以降のエルサレムにおける毎日を生きる上で、場所や空間、国への帰属性、およびジェンダー・アイデンティティがどのような影響を与えているのかについて、理解を深めることを目指すものです。第一に、パレスチナの人びとが軍事占領によって日常的にどのような経験をしているかを明らかにし、イスラエルがアラブ・エルサレムに強いている心理社会的および政治経済的束縛と制限の前で、人びとがどのように生き抜き、どのような戦略を持って対処、適応しているかを明らかにしたいと思います。第二に、イスラエルによる都市政治や人口政策、政治的・経済的・社会的制限および政治的暴力の影響下で、パレスチナの人びとが直面する主要な困難は何であるかを明らかにすることを目指します。第三に、今後の調査研究の方向性に関するいくつかの提案と、人権やフェミニズム運動に関わっている個人や団体に向けてさまざまな提言をします。

この調査では、アラブ・エルサレムの植民地的文脈における軍事化した人種差別と「場所の政治」に焦点をあてます。個人や家族が、暴力や排除、また強制退去といった文脈の、「内」と「外」両側に同時に存在するものとしての自らの生活について、どう感じているのかを浮き彫りにします。調査を通じて一人ひとりの声に耳を傾けることで、エルサレムにおける場所の政治、特に、分離壁のようなイスラエルの人種隔離政策、その他パレスチナの人びとの身体や精神、生活また土地を囲い込み、閉じ込めている空間的、政治・経済的政策に現れている政治が及ぼす影響について、理解を深めることを目指しています。

この調査報告の結論では、エルサレムに住むパレスチナの人びとの歴史を分析するうえでフェミニスト政治が現在直面している、最も差し迫った理論的および方法論的課題への取り組みを試みます。すなわち、植民地的軍事占領の日常性をどう解釈、記録し、この状況にどう立ち向かうかという課題です。この調査は、国家的苦闘が続いている状況で、ジェンダーの違いに基づく経済的・心理社会的・政治的弾圧の見えざる道具としての地政学と空間政治を視野に入れた、フェミニスト理論およびフェミニスト政治の構築を目指す第一歩です。

今回の調査方法は、著者の見解を明確に反映しています。それは、エルサレムのように政治紛争に苦しむ地域で一人ひとりの話を聞き取り・記録するにとどまらず、現状に対する反論となる証言を構築して今後の政治や政策を展開していくために、人びとの心理社会的側面とジェンダーに特に焦点を当てた声を探し出して耳を傾け、そこから学びとる必要性に迫られているというものです。

² アイデンティティ政治 (英: *identity politics*) は、主に社会的不公正の犠牲になっているジェンダー、人種、民族、性的指向、障害などの特定のアイデンティティに基づく集団の利益を代弁しておこなう政治活動。(ウィキペディアより <http://ja.wikipedia.org/wiki/アイデンティティ政治>)

■概念的枠組■

はじめに

イスラエルの植民地的イデオロギーと官僚制度は、除外対象である「他者としてのパレスチナ人(the Palestine Other)」を作り出し、指定し、支配する特権を持つ人種主義的・政治的機構として機能してきました。除外対象の区分として人種(パレスチナ人)を導入することで、この「他者」が除外される際の「あからさまさ」(“bareness”)が生み出されます。この報告書の中で提起するとおり、植民地的人種主義は排除の政治に組み込まれています。それは、パレスチナの人びとの身体と生活を周辺に追いやり、脅かし、例外扱いし、人種や階層、性別あるいはジェンダーの違いを根拠に、ひいては人びとを例外扱いしようと権力者が利用する政治的戦略です。

このような排除の政治により、「よそ者パレスチナ人」という民族差別意識が、地域レベルと世界レベルで加速度的に広まります。この報告書では、排除の政治が持つ影響力についての理解を目指します。暴力と絶望にふさがれた日常生活、すなわち人びとを閉じ込め、権力に対する人びとの抵抗を阻む生活構造そのものから、排除の政治は再生され、増幅されます。囚われているという現実囚われの身にある人びとに、権威主義的排除の認識を(それが一人の男性のものであれ、イスラエルのものであれ、覇権や絶対支配権によるものであれ)自らのものとして取り入れさせて再生させ、日常生活の行為に反映させる可能性があるのです。ムムベ(Mbembe)は、次のように説明しています。

隷属状態が想定を超えた過酷さを現しているなら、それは社会ネットワーク、宗教的崇拜や結社、また調理法、余暇の過ごし方、消費スタイル、服の趣味、言葉づかい、コミュニティの政治経済など、ありとあらゆる日常生活の場面で、隷属している側が権威主義的認識を再現させるほど、この認識を自らの内面に深く浸透させていることにも起因する。(1992: 23)

排除やトラウマ、政治的弾圧という暴力は、権力と権力不均衡の濫用ですが、これは地域固有のものではなく、世界のダイナミズム(力の作用)と構造の中に本質的に存在しています。このような暴力は、紛争から突然生じた異常な状態の結果ではなく、政治支配あるいは占領支配と軍事占領体制の中核部分なのです。トラウマと排除そして被害を別個に検証し、暴力の事例ごとに身体的・心理的な傷に焦点を絞る事例本位の理論分析は、政治・社会的状況の影響が小さい暴力の事例分析には一定の役割を果たしそうです。しかし、この種の分析は、女性と男性の社会的「束縛」(social “trappedness”)を助長しかねません。政治的状況を切り離しておこなわれるこうした分析では、例えば、エルサレムのような軍事占領下で男性と女性の発言する能力は平等であると仮定されます。しかし、この分析方法では、家族内の暴力から恐怖や不平等が生み出されるメカニズムの解明はおろか、社会における同様のメカニズムの解明も不可能です。また、コミュニティや拡大家族のメンバーは中立の存在ではなく、ほとんどの場合、被害者を支えることも不法な侵害者を非難しようと立ち上がることもないことを、事例本位の理論分析は見落としています。

トラウマとその意味: パレスチナの事例研究

政治的暴力が続いているパレスチナのような状況では、トラウマの経験は、世界と地域の政治情勢や社会経済的状況の趨勢と、密接な相互関係にあります。パレスチナの人びとは 19 世紀初頭以来、過酷なトラウマの苦しみに耐えています。このトラウマは 1948 年のパレスチナの大惨事 (Palestinian Nakba) で最悪の状態に陥りました。ナクバ (Nakba) は今日まで 60 年以上続くトラウマの経験です。人びとが心や精神、身体に絶えず抱えて

いる苦しみは、さまざまなレベルで、個人や家族、コミュニティ、また広くパレスチナ社会に表れています。よって、トラウマを研究するには、トラウマを物語る社会・歴史的側面の精査が欠かせません。そのために著者は、マーティン・バロ (Martin-Baro) の「社会的トラウマ」という概念 (1989) を用い、個人と社会との相互関係の中で、過去も現在も人びとを傷つけている歴史的・社会的ダイナミクス(作用)を論じます。

トラウマを全く独立した経験だと見なすと、トラウマが及ぼす影響への理解が妨げられ、背景にある歴史的、社会的、政治的、経済的、個人的状況とトラウマの意味が切り離されます。その結果、トラウマを癒す効果的な介入法を考え出す私たちの能力が損なわれると、著者は考えます。紛争にあえぐ地域のトラウマは、個人の問題としてのみならず、社会の問題としてもとらえなくてはなりません。社会的トラウマとは、心身を傷つける歴史的・社会的ダイナミクス(作用)であり、このダイナミクスは個人と社会との相互関係の中で維持されています。

さらに、パレスチナの状況におけるトラウマは、侵害と被害が連鎖するプロセスとして調査するべきであると著者は主張します。トラウマは、ある一定の社会・政治的状況に関連して起こり、その状況によって変化するものです。侵害と被害の連鎖は強化され、連鎖の持続期間は時と空間で変わるものだと、著者は考えています。また、主に過酷なトラウマが持続している間は、侵害と被害の連鎖が個人と社会の心理的許容能力を超えるため、この連鎖への理解と対処がおよばない場合があるとも考えています。このようなトラウマは、人びとの帰属意識やアイデンティティ、首尾一貫性、生き延びる力、また生死に影響します。

心的外傷ストレス障害 (PTSD: post-traumatic stress disorder) の概念上の欠如に関してラテンアメリカで発表された論文と批判 (ライクス Lykes 1996、ベッカー Becker 1995) を参考にすると、長年におよぶ苦難と政治的弾圧に耐え続けるパレスチナの人びとを「障害」に苦しんでいると決めつけるのは、根本から倫理にもとるものです。しかし残念ながら、「障害」という言葉は各論文に広く見受けられるのです。パレスチナの研究者が中心となって進めた調査研究や著者自身の過去の論文の中でさえ、この言葉が使われています。パレスチナの人びとが受けているような苦難を、なぜ障害であると断定するべきではないのか、理由はさまざまです。特に、怒りや不安、悲しみ、鬱(うつ)というのは、苦難や政治的弾圧 (排除されること、家族を失うこと、迫害、経済的搾取など) に対する正常な反応です。「障害」という言葉は、苦難や弾圧を加えている側にこそ向けられるべきなのです。パレスチナの状況においては、不安定な、あるいは混乱した政治状況にこそ、「障害」があてはまると著者は考えます。さらに、パレスチナに見られるようなトラウマの日常的持続性を考えると、PTSD という用語は、障害 (disorder) という言い方に問題があるだけでなく、post-traumatic(トラウマの”後”)という言い方も正確ではありません。

パレスチナの社会生活に対する軍事占領に加え、イスラエルによる組織的な法弾圧と法律違反、さらにパレスチナの人びとが苦難の歴史への承認を得る権利を地域や世界が否定していることすべてが、パレスチナの人びとの健康やアイデンティティ、帰属意識に悪影響を及ぼしています。パレスチナの人びとは、日常の中で習慣化した屈辱と抑圧に耐えているのです。

社会・政治的状況を別個に扱うことはトラウマへの対処には役立たず、むしろトラウマの影響を増幅させます。従って残された問題は、パレスチナの状況のように複雑な事例に関して、トラウマとトラウマの及ぼす長期的な影響をどのように概念化するかです。パレスチナでは何世代にもわたり、人びとは絶えず破壊にさらされ、常に権利の侵害を受けてきました。

地理的排除と空間的分析

高度に政治化した状況において、非常に広範囲に起きている抵抗への空間理論の応用は、弾圧の系統的性質の解明に貢献してきました(ラザック、2002)。空間理論は言語領域にとどまらず、記憶や内面化された主観論の領域にも及びます。なぜなら、ラディカ・モハンラム (Radhika Mohanram、1999)が主張しているように、権力は空間を利用して組織されるからです。従ってこの空間理論が、ある特定の空間において「よそ者」意識や支配と従属のアイデンティティを生み出す手法の解明に役立ちます。この理論は、ある空間における「よそ者」としてのパレスチナ人の、民族としての成り立ちに関する理解を助けます。占領や法規制、また領土とされた空間と領土から除外された空間を調査することで、空間の力や場所の政治について理解を深めることができ(ジェーコブズ Jacobs 1996)、主として場所が政治利用されるメカニズムの解明につながります。

ある民族の神話や物語、そして経験は、過去から現在に通じるものです。国や場所、また位置についての物語は民族によって明白に異なります。先住パレスチナ人の間で伝わり・広がる物語がある一方で、イスラエルの占領により創り出された物語があります。イスラエル人の歴史の一部としてイスラエル占領軍が作り出した、国と場所についての物語(「国のない民へ、民のない国を」)は、先住のパレスチナ人個人の歴史や物語とは相容れないものです。入植者の物語では、民のない国には「神に選ばれし民」が住むのだといいます。よそ者として疎外され、民族差別を受けた人びと(パレスチナ人)が入植者の領域(物語)に現れることはほとんどありません。これは「よそ者パレスチナ人」の存在が意識できなくなる欠損です。

この調査報告書では、エルサレムに関するイスラエルの物語を取り出して、パレスチナの男女それぞれから聞き取った話とひとつひとつ照合し、そこからイスラエルの支配のイデオロギーと手段を明らかにします。この作業を進めるにあたっては、アイデンティティと空間との関係を探らなくてはなりません。なぜなら支配のアイデンティティ確立には、よそ者の民族をある場所、つまり閉ざされた空間に閉じ込めておく必要があるからです。実際の空間や場所、そして居住地の物理的および象徴的成り立ちを検証し、空間的見地から支配に迫ります。パレスチナの人びとを限られた場所に拘束し、検問所を設けて目的地へ行かせず、子どもたちを学校から、農民を農地から、また各コミュニティを親類の繋がりや地域の営みから遠ざける時、イスラエルは却って民族的空間の広がりを直接的に経験するのです。

今回の調査で私たちは、空間政治に注目することで、社会的階層やジェンダーの序列の問題に取り組むことを強調しておきます。つまり、権力や家父長制、および資本主義に基づく政治に関する問題に取り組むということです。例えば、パレスチナの少女に多い「中途退学者」が教育から遠ざけられる理由を考えるためには、パレスチナの学校の空間とパレスチナの少女が住んでいる居住地について論じなくてはなりません。通学路や、学校と自宅との間の空間はどの程度安全なのか。通学のために毎日分離壁をよじ登って越え、検問所に並び、軍事区域で兵士とやり取りしなくてはならないことが、どれほど勇気を必要とするか認識されているのか。空間的分析によって、イスラエルによる占領下の弾圧が、政治や健康、教育、経済およびジェンダーなどさまざまなシステム内で、どのように作用しているかを改めて浮き彫りにすることができるのです。

ナクバ(パレスチナの大惨事 Palestinian Nakba): 際限のないトラウマと迫害

この章で著者は、1948年にかけて起きたパレスチナのナクバ(Nakba、大惨事)と、それに伴う犠牲や強制退去、そしてパレスチナ社会の崩壊は、その後もパレスチナの人びとが生活の中で直面し続ける忘れ得ない歴史のしるしであると主張します。さらに著者は、今なお続く犠牲や、正義の否定を止めることができない「民主主義」

の失敗から、この大惨事は過酷さを増していると訴えます。この章の目的は、ナクバが及ぼす心理的影響について、完璧な再検討、あるいは批判的な再検討を試みるのではなく、ナクバの全体像をとらえ、理解する第一歩とすることです。原因を知るとは、現状と今後の方向性を見定める上で欠かせません。従ってこの章では、史実としてナクバを理解しようと試みるのではなく、2010年にパレスチナの人びとがナクバをどうとらえ、ナクバにどう向き合っているのかを、まず明らかにしたいと思います。

困難な状況下で生き抜くには、アーロン・アントノフスキー (Aaron Antonovsky) (1983) が言及している「首尾一貫感覚 (sense of coherence)」が求められます。「首尾一貫感覚」とは、自分が置かれている状況に意味を見出し、その状況に適応して生きる方法を探す能力です。過酷なトラウマや虐殺を生き抜いた人びとの病的な行動に関して心理学的側面から研究する理論家は、トラウマによる長期的影響を「生き残り症候群 (survivor syndrome)」、「迫害症候群 (persecution syndrome)」、あるいは「強制収容所症候群 (concentration camp syndrome)」と呼んでいます。こうした症候群の典型的な徴候には、自責の念や慢性的な怒り、不安、睡眠障害、無快感、フラッシュバック、過剰な警戒感、うつ、強迫的侵入思考など、PTSDに含まれる症状があります。しかし、この症候群を一般化し、徴候のあるすべての人びとのトラウマをこの症候群に当てはめるのには、大変問題があります (ピラル・ヘルナンデス Pilar Hernandez 2002 参照)。今なお続くトラウマにどう対処・適応しているかをより注意深く観察することで、トラウマに向き合う人びとのたくましさや回復力など、人間に備わっているプラスの側面を浮き彫りにすることができるのです (リフトン Lifton 1993; ヒギンズ Higgins 1994)。家族がたどった歴史の中から、生き延びた人びとに力を与え、彼らをさらなる抵抗へと駆り立てた要因や条件、時期を探ることが、極めて重要です。また、次のような問いかけも大切です。生き延びた人びとは、トラウマが起きた空間で今も暮らしているのか、それとも強制退去させられ難民キャンプでの生活を強いられているのか。(強制退去させられたなら、) 新しい生活環境にはどのように適応しているのか。また強制退去させられた人びとは、新しい環境ではどのような立場なのか (というのは、パレスチナの人びとは、例えば強制退去をおこなった側の国民と定められているか、民族的違いを根拠に公民権を剥奪されている可能性があるのです)。

これまでの章で示されたとおり、精神疾患の類別とPTSDの分類に関して、「後(post)」と「障害(disorder)」という概念は、絶えず苦しめられている人びとを理解し、支援するための手段としては不適当です。パレスチナでのトラウマの日常的持続性からすると、PTSDの「後(post)」という言葉は「ナクバ以後(post-Nakba)」という概念のみ当てはまるものであり、ナクバはトラウマの経験の始まりを意味するものです。人それぞれ、長い年数を経る中でさまざまな症状が表れ、環境の変化とともに別の症状が表れる可能性があります。従って、自分が存在する空間や場所、社会・文化的領域で集団的残虐行為と破壊に苦しんでいる全世代のトラウマと、トラウマによる長期的影響を概念化できるかどうかは不透明です。

パレスチナの事例において、現在も持続している政治的トラウマの状況をとらえるには、パレスチナの人びとが長年強いられている苦難の影響を一つ一つ別個にではなく、全体から精査することが求められます。この精査のためには、排除の政治に注目するだけでなく、不当行為の歴史を背景とする迫害による影響の調査が不可欠です。パレスチナの人びとはイスラエルから受けた暴力を、何十年にもわたる喪失や排除、また愛する者に対する危害の原因となっている、歴史的・政治的・社会的力学(ダイナミクス)に関連した社会的トラウマであると解釈しています。迫害や民族浄化、社会構造の破壊、また帰属意識やコミュニティのネットワークおよび信頼関係のゆがみによる影響を、より広い社会的文脈から個人の視線で考察することで、苦難への理解と認識が深まり、苦難に対処するよりよい方策が得られるのです。パレスチナの人びとが自分たちの土地で受けた迫害は、個人

の人生観に破壊的影響を及ぼしました。迫害の政治とその重大さを理解するための第一歩は、このような迫害に対して道義的に明確な反対の姿勢を取ることです。迫害を原因とするトラウマに中立の立場を取ることが擁護できないだけでなく、倫理にもとるものです。

■エルサレムにおける政治情勢の変化:その現状■

私は以前「パレスチナ」は所有権剥奪の隠喩であり、それは強制退去とともにパレスチナ人の経験したことにおいてはもちろん、パレスチナ人のアイデンティティにおいても重要な特徴であると述べました。これは1948年にパレスチナ難民が受けた最初の所有権剥奪と強制退去によるものだけではありません。むしろ彼・彼女らやその子孫が61年後も強制退去させられたまま、自分たちの存在を守ろうと自国の残された土地で苦勞していることによる方が大きいのです。

東エルサレムはパレスチナ人の心の中で特別な位置を占めています。それはいつか自国の首都を置きたい場所だからです。国際社会はエルサレムを共有の首都として(イスラエルとパレスチナ)2つの国を建国することを目標としていますが、東エルサレムのパレスチナ社会を苦しめている、イスラエルの組織的な入植活動や基本的な人権侵害を考えると実現するのは非常に難しいと思われます。処罰されることなくおこなわれる都市部への入植活動による影響は多様であり、深刻です。2つの文化の並置は、暴力と緊張が伴い、何十年も続いてきた社会環境を破壊しています。

カレン アブザイド(Karen AbuZayd)、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)事務局長
世界人権デー、2009年12月10日

この研究の中心となるデータ分析を始める前に、読者の中には最初に東エルサレムのパレスチナ人が置かれている現状の概要について説明するほうが良い方もいるでしょう。エルサレムはイスラエルの政治的、経済的、社会的犯罪行為のあらゆる手法を見ることができることから、シオニストとパレスチナ人の紛争の縮図と言える場所です。この都市の現在の歴史、特にここ数年の歴史の大半は、経済的、社会的、法律的、政治的にパレスチナの他の地域から分離される歴史でした。エルサレムのアラブ地域における統治権や決定的な支配権の保有というイスラエルの政策はパレスチナ人を常に弾圧し、混乱に陥れています。さらにエルサレムの状況を複雑にしているのがアラブ地域に住むユダヤ人の増加です。彼らは思想的・政治的目的で入植し、場所を占有し続けています。

エルサレムに住むパレスチナ人たちは、宗教的、文化的、教育的施設へのアクセスが認められず、学校、診療所、電気、水道、下水道を含む自治体サービスの管理をおこなうことができず、インフラの維持や、自分たちの必要に応じた都市計画や管理をおこなうこともできません。複雑で多角的な分類体制はエルサレムに住むパレスチナ人に異なる法的地位を与え、さまざまな権限を制限し、特に移動する権利を制限しています。一 가족の中でも、エルサレムの身分証を持つ者と西岸地区の身分証を持つ者がおり、イスラエルの曖昧で常に変化する分類や選定基準は家族を分離し、ばらばらにさせています。従って、すべての重要な社会的、政治的部分において、エルサレムに住むパレスチナ人の生活はイスラエル当局に規制され、細かく管理されているのです。さら

に、イスラエルの領土権の主張、占領し、隔離し、最終的にパレスチナ人をエルサレムの土地や家から追放するための組織的・構造的なシオニズム政策の実行は強化され続けており、アラブ人に対し計り知れない影響を与えています。

歴史的政治的背景

歴史の中で、エルサレムは政治、宗教、文化の中心地として重要な役割を果たしてきました。そのため、支配権を争うために数え切れない紛争の場となりました。歴史的に根付いてきたパレスチナの地からアラブ人を追放するため、1848年から1952年の間に用いられたシオニズム運動による支配と脅迫は、1967年のイスラエルによるパレスチナの武力侵攻後にも再びおこなわれました。バディール資料センターは、約43万人のパレスチナ人が1967年の戦争の後強制退去させられ、半数はこれが2度目の退去であったと報告しています。(Badil, 2007年)³

1967年の第2次シオニスト-アラブ戦争の結果、イスラエル軍は東エルサレム、西岸地区の残りの部分、ガザ地区、エジプトのシナイ半島とシリアのゴラン高原を占領しました。占領した地域の合計は849平方キロメートルであり、これはイスラエルが1948年から1967年までの間に占領を拡大してきたパレスチナの土地と同等の広さにもなります。

排他的統治権を確固たるものにしようと、イスラエルは最も強力な地政学的戦略を1967年以来執っており、これは紛争の最も重要な問題であったにも関わらず、初めてエルサレムの問題が交渉の場に持ち出されたのは2000年7月におこなわれた米国・キャンプデービッドでの会談の時でした。和平交渉の始まりから2007年11月のアナポリス会議までの数ヶ月の間に、エルサレム市のイスラエルとパレスチナ境界の内外において、イスラエル側による入植地建設がユダヤ人入植者グループとの密接な協力により大きく加速しました。

実は、以前の被占領地パレスチナ(Occupied Palestinian Territories, OPT)に居住していたユダヤ人入植者約47万人の内、40%あるいは19万人は現在東エルサレムに住んでおり、他9万6,000人はエルサレムの周りの入植地で暮らしています。(Passia、パレスチナ国際問題研究学術協会、2009年)⁴ 1967年の軍事占領以来、イスラエル政府は容赦なく、執拗に、エルサレムのアラブ地域の「ユダヤ化」政策を進めてきました。ユダヤ化の継続的な運動の目的は、アラブの首都としてのエルサレムの歴史的・文化的・政治的特徴を変え、新しい地政学的現実を作り、ユダヤ人による支配を保ち、シオニストによる都市全体の領土・人口・宗教の管理を確実にすることです。広範囲に及ぶパレスチナの土地の没収やパレスチナ人に対する永久的な強制退去は、多種多様な方法により進められています。最も非道なものとしては東エルサレムにおける大規模な「公的」ユダヤ人入植地の建設、パレスチナ領域内でおこなわれるパレスチナ人に対する軍事検問、道路封鎖、「ターミナル」における道路管理の体制、人種隔離壁の建設、絶え間ない家屋の取り壊し運動が挙げられます。

現在、エルサレムの面積の66%以上は、イスラエルが別々の時期にパレスチナを強制的に占領することで得た土地です。このうちの3分の1にあたる、アラブ人が東エルサレムに所有していた土地を、イスラエルはイスラエル人入植地建設のために乱用しました。(Passia、2009年)この入植地はエルサレムを囲むように、2重の円の形で建設されました。「内側の円」は境界線を通っており、外側の円は「大エルサレム地区」と呼ばれ、西岸地区に深く入り込んでいます。

³ バディール資料センター BADIL <http://www.badil.org/>

⁴ パレスチナ国際問題研究学術協会 PASSIA <http://www.passia.org/>

エルサレム市政の「ユダヤ化」

エルサレムにおけるユダヤ人の存在を高め、支配を強めようとイスラエル政府は都市におけるアラブ住人の居住権と社会保障を取り消し、アラブ人の建設権に厳しい規制をかけ、パレスチナ人の移動許可証を認めず、パレスチナの広大な土地を没収し、パレスチナ地区のインフラ整備を意図的に無視してきました。

エルサレム境界内におけるパレスチナ人に対する計算された分断化において極めて重要となるのは、イスラエルによる法的地位の付与と身分証の割り当て体制です。パレスチナ人の身分証の没収は1967年のエルサレム併合後すぐに始まりました。1967年から2000年、東エルサレムにおけるイスラエルによる占領の最初の40年間に、イスラエル内務省は合計8,558人のパレスチナ人から都市の居住権を取り上げました。驚くべき数字ではありませんが、ここ数年、居住権を認められないパレスチナ人の数は急増しており、かつてないレベルです。2008年から2009年の間だけでも4,577人の東エルサレムのパレスチナ人が居住権を取り上げられました。(Hasson, 2008)この数字はそれ以前の40年間、軍事占領されていた時期の平均の21倍です。従って、1967年の戦争以来、東エルサレムの居住権を失ったパレスチナ人のうち約35%は、2008年の1年間で失ったこととなります。また、2008年に居住権を奪われた人のうち99人が未成年でした。これらの事実から明確なように、ユダヤ人の人口的優勢をエルサレム全域に持たせるために、イスラエル当局は最近、より一層組織的にエルサレムに住むパレスチナ人への対策を強化しています。強調すべきは、一度パレスチナ人がエルサレムの居住権を失うと、健康や教育、家族に関する理由であっても、エルサレムに戻ることは不可能だということです。従って、パレスチナ人はイスラエルによって効果的に自国、故郷、家に住む基本的な権利を奪われているのです。

東エルサレムのパレスチナ地域におけるイスラエルの政策は、イスラエル領域に暮らすパレスチナ人に対する政策に極めて似ています。人種に基づき、構造的、組織的、法的レベルで差別的な政策が取られているのです。(Kretchmer, 1998) 東エルサレムに住むパレスチナ人の場合、人種差別はとりわけ地方自治体の予算の割り当てに反映されています。その結果、下水道、歩道、公営の庭園、スポーツ施設、図書館、教育、文化センターの整備や管理は不十分となっています。一方、西エルサレムのユダヤ地域ではすべてのサービスがしっかりと提供されています。上記で述べたように、イスラエルは常にユダヤ人専用入植地を計画し、発展させ、建築し、エルサレムの境界における拡大を急速に進めています。これは、国際人道法におけるイスラエル占領軍としての義務において、また、ロードマップ、アナポリス会議での約束においても完全に違反するものです。パレスチナ人の生活を犠牲にして、エルサレムにおけるユダヤ人の存在を増すことは、東エルサレムのパレスチナ地区をユダヤ人の市街区で包囲し、パレスチナの歴史もろともイスラエルの統治下に置き・支配権を守るといふ、シオニストの目標にとって不可欠なことなのです。

この目標のため、イスラエル当局はさまざまな法的メカニズムを取り入れました。その中にはパレスチナ人の所有する土地を「グリーンエリア」と宣言することも含まれます。グリーンエリアは、特定の場所に最低限の緑地を保つため、建設が認められないオープンスペースだとイスラエルは規定しています。しかし、東エルサレムにおけるグリーンエリアの運用は、ユダヤ人入植地付近でのパレスチナ人による開発を制限するための政策ツールとなっています。そのため、オープンスペースと指定されたグリーンエリアで実際に植物を植え、保存されている場所はほとんどありません。この法的メカニズムは、パレスチナ人による都市部での建設を妨げる一方、将来のユダヤ人入植地拡大のため、パレスチナ人の土地を取り上げることを可能にしています。

「グリーンエリア」と宣言され、ユダヤ人専用入植地が建設された地域の例としてヤバル・アブ・グネイム(ハル

ホマ入植地の場所)とシュファト(ラマツシュロモ入植地の場所)が挙げられます。実に、約44%の東エルサレムのパレスチナ人所有地がイスラエルの建築規制の計画により「グリーンエリア」と「オープンエリア」に指定されました。(Passia、2009年)。

これらすべての方法や政策をつなげる共通点は、東エルサレムのアラブ人地域において、ユダヤ人の優勢を保つという目標です。この目標のためにイスラエルは、エルサレム旧市街とその周辺地域を、隣接したパレスチナ人地区から即座に切り離し、ユダヤ人で繋がった地帯をエルサレムの内部と周辺に築こうとしており、イスラエルとパレスチナとでエルサレムを分割することを前提とするような将来的合意の組織的、政治的可能性を阻止しています。

自治区の境界を越えた占領と定住:「大エルサレム」計画

エルサレム内部と周辺でのイスラエルによる入植地建設事業は、自治区の境界をはるかに越えています。これはユダヤ人を都市の大多数として維持し、また、都市の周りでのユダヤ人の優勢を保つことを目的としているからです。そのような点から、「大エルサレム」計画はエルサレムの自治体の境界への入植地拡大を強め、既に都市周辺に暮らしている9万6,000人強のユダヤ人の大幅な増加を確定しています。基本的に、政治的に推し進められる大エルサレム計画は、ユダヤ人とパレスチナ人の人口の割合が70:30の大都市エルサレムを作ることを目指しているのです。(Passia、2009年) 地理的、人口動態的操作により、イスラエル政府はエルサレムの都市圏として、西岸地区の約30%にまでそのエリアを拡大しようとしています。そのエリアには、北はラマツラから南はヘブロンまで、東のエリコから西のベト・シェメシュまでが含まれます。この地域を合計すると440平方キロメートルを超え、4分の1に満たない部分のみが、国際的・法的に認識されている1967年以前のイスラエル国境線内に属することになります。

政府により開始された大エルサレム計画を支持するイスラエルの都市計画者と人口統計学者により進められている2つの方策は:1つ目は、パレスチナ人を自分たちの土地から離し、強制退去させ、排除すること、2つ目は計画に含まれている地域の入植地の規模を2倍にする建設計画を開始することです。これらの入植地はその後、互いに繋がられる計画です。例えばギヴァ・ゼブ(Givat Ze'ev)はアガン・ハ・アヤロット(Agan Ha' Ayalot)に、ゲバ・ベニヤミンはネベ・ヤコブに繋がられる予定です。これは、エルサレムの自治体の境界周辺にユダヤ人専用地域の「外輪」を作るためなのです。大エルサレム計画は明らかにイスラエルのシオニストの考えから生まれたイデオロギー的、政治的試みであり、都市エルサレムを主にユダヤ人で構成し、パレスチナ西岸地区の30%程まで広げるといったものです。

イスラエルの領土管理をめぐる多角的体制

・ 軍事検問所、道路封鎖、ターミナル

1991年-2000年のマドリッド会議およびオスロ和平プロセスの後、エルサレム先住のパレスチナ人の土地を違法に収奪する行為が加速していきます。それに伴いイスラエル側は、これは盗まれた土地を「守る」ための「防衛」または「安全」政策であるという口実を使い、その後奪った土地にユダヤ人入植地を作っていきます。武装し闘争的な入植者を非武装のパレスチナの一般人から「守る」ため、イスラエル政府はより不当に厳しく、屈辱的な方法を取り入れ、道路封鎖や軍事検問所のネットワークを確立し、パレスチナ人の農地を使い、土地を没収し、迂回道路を敷いていきました。現在パレスチナ西岸地区からエルサレムに入ることができる道路が12本ありますが、パレスチナ人がエルサレムに入れるのは4つの道路に限られています。北のカランディア、南のギロ、東

のシュファト難民キャンプ、アブ・ディスとアル・イッザリヤの住民が徒歩通行のために使用する西のラス・アブ・スベタンです。他の8つの道路は西岸地区に住むパレスチナ人には封鎖されており、通行できるのはイスラエル人の入植者と有効なビザを持つ非イスラエル人に限られており、イスラエルがパレスチナ人に対しアパルトヘイト(人種隔離政策)のような政策をとっていることを明確に示しているものです。(Passia, 2009年)

この植民地支配的、民族差別的な構造はイスラエル政府に、エルサレムと西岸地区の広範囲に暮らすパレスチナ人のすべての面において空間的に支配し、監視し、管理することを可能にしています。人種隔離壁建設はエルサレムのアラブ社会を分断し、孤立させることに大きく貢献しました。

・ **人種隔離壁**(以下、分離壁)

分離壁は通行許可証とゲートによる管理体制とともに、すでに強制退去させられた者も自分の家に暮らし続けられている者も含め、エルサレムに暮らすすべてのパレスチナ人の移動の自由を規制しています。例えば、軍事検問所を通過するためにかかる時間は、エルサレム市内とその周辺に暮らす94.7%のパレスチナ人家庭にとって、暮らしの妨げとなっています。(Badil, et al., 2006年) 計画されている最終的な壁の全長は790キロメートルであり、約167.3キロメートルはエルサレム市内とその周辺に建設される予定であり、この広がりには婉曲的に「Jerusalem Envelope(エルサレムを包む封筒)」と呼ばれています。2008年中頃イスラエル政府は工事の50%が終了したと発表した。この時点でエルサレムの228.2平方キロメートル、つまりパレスチナ西岸地区に属す土地の3.9%が壁により分離されました。(Passia, 2009年) 分離壁が完成すると、23万人以上のエルサレムに暮らすパレスチナ人が西岸地区から孤立し、また、分離壁の「東側」で暮らす200万人以上のパレスチナ人が東エルサレムから分離させられるのです。例えば、分離壁はワラジェ、クフル アカブ(Kufr Aqab)、シュファト難民キャンプにおいて、すべての地域或いは多くの地域を東エルサレム市街地から分離しているため、パレスチナ人をエルサレムからだけでなく、お互いのコミュニティからも引き離しています。歴史ある多くの土地を失うことに加えて、パレスチナ人は法的に曖昧なひどい状況におかれています。エルサレムの身分証は保有していても東エルサレムへのアクセスは認められておらず、また同時にイスラエルの在留資格を保有していないため、イスラエルから提供される基本的なサービスの提供を受けることもできません。

また、アパルトヘイト分離壁は完成すると、東エルサレムを囲むギボン、アドゥミム、エズィオンの3つの主要な入植地と占有地に伸びることになります。この土地はパレスチナ人の人口増加と社会経済の発展に不可欠な土地です。(Passia, 2009年) 分離壁はパレスチナ人地域の将来の発展を妨げ、同時に多くの地域が「オープンスペース」、「グリーンエリア」として将来のユダヤ人入植地の拡大用に保有されています。パレスチナ人のおかれる全体的な状況はより複雑で難しくなっています。分離壁はパレスチナ人の移動する自由を一層妨げており、パレスチナ人の土地へのアクセスや適切な水準で生活する権利を侵害しています。

・ **分離壁と強制退去**

パレスチナ人に対する移動の自由の規制はエルサレムに暮らすパレスチナ人に対する強制退去の大きな要因となっています。実に、46.1%のエルサレム在住のパレスチナ人は、過去に一度は強制退去をさせられたことがある難民であり、分離壁は新しい強制退去の波を作り出しています。バディール資料センターの報告によると、32.9%のエルサレムに暮らすパレスチナ人は分離壁が原因で引っ越しており、20%は不本意ながら引っ越しています。後者の83.3%は人生の中で一度は強制退去をさせられており、9.3%は2回、7.4%は3回かそれ以上となっています。(この数値には1948年と1967年の戦争による強制退去は含まれていない)(Badil, et al., 2006年) また、49.2%のエルサレムに暮らすパレスチナ人は分離壁により引越しを余儀なくされ難民となっており、難民状態にあってもなくても、分離壁とそれに伴う体制の影響を受けていることを示しています。

母子家庭は特に分離壁により強制退去をさせられています。エルサレムに暮らす家族のうち10.2%が、また、引越をした全家族のうち13.7%が母子家庭です。(Badil, et al., 2006年)

・ **社会、経済、文化的権利の侵害**

エルサレムに住む約39%のパレスチナ人がイスラエルで働き、収入が多いにも関わらず、東エルサレムに暮らすパレスチナ人の経済状況は西岸地区に暮らすパレスチナ人の状況とほとんど変わらないことを、ほとんどの指標が示しています。エルサレムのパレスチナ人の失業率は、残りの西岸地区の失業率を越えており、特に分離壁の東側は悲惨な状態です。エルサレム市は2006年、パレスチナ人の失業率を15.7%と予測しましたが、分離壁の東側は26.3%でした。(Badil, et al., 2006年)

失業率が上昇し続けているのは、分離壁とそれに伴う体制により、分離壁の両側に暮らすパレスチナ人の雇用を、清掃業、商業、レストラン、ホテル、工事(主に入植地を含むユダヤ人専用の地域での工事)、炭鉱、製造、輸送分野といった、技術を必要としない職種に制限しているためです。雇用は可動性によって決まるため、イスラエルによるパレスチナ人に対する多くの規制は雇用の機会を不足させています。

パレスチナ人の私有地、商品、農業製品である穀物、農業機械、温室、家畜は分離壁の建設とそれに伴う体制により大きな被害を受けました。実に、10.2%のエルサレムに暮らすパレスチナ人と土地を所有する19.2%が壁の建設により土地のすべて或いは一部を取り上げられています。(Badil, et al., 2006年)

パレスチナ人の文化的、宗教的生活や地域活動に参加する権利は分離壁により著しく損なわれています。56.3%以上のパレスチナ人家庭、特にエルサレム地域では文化的、社会的活動において分離壁やそれに伴う体制により規制を受けています。(Badil, et al., 2006年) 最も損なわれているのはパレスチナ人家庭が分離壁の東側の聖なる地を訪れることです。91.8%は礼拝する場所へのアクセスを拒否されるか、訪れるにあたり大きな困難に直面しています。

・ **健康の権利の侵害**

健康状態の悪化はエルサレムのパレスチナ人のもう一つの大きな懸念事項です。東エルサレムのアラブ地域における低開発は、エルサレムのイスラエル人入植者の植民地支配により引き起こされている資金不足、差別、社会的疎外が大きな要因です。2006年バディール資料センターのおこなった調査では、分離壁の東側に暮らす大多数のパレスチナ人家庭は公共医療サービスを利用するのが非常に困難であることを確認しています。34.5%の家庭の内、壁の東側に暮らす88.3%は病院、クリニックや都市の他の医療センターから離されています。(Badil, et al., 2006年) さらに、分離壁は、医師、看護師、医療スタッフが病院や他の医療施設へ移動することを妨げており、これは女性、特に病人、高齢者、妊婦にとって極めて危険な状況です。

・ **教育権の侵害**

東エルサレムに暮らす約43万人のパレスチナ人の教育環境は、都市において強化されるイスラエルの管理やさらなる差別的な政策やその実施により、一層ひどい状況にあります。分離壁の建設や多数の軍事検問所の設置、道路封鎖が都市内部とその周辺で実施されたことにより、特にパレスチナ人の女性や若者の状況を一層悪化させています。壁の建設により、例えば、エルサレム市内に暮らす5歳以上の子どもの43.9%しか教育機関に通っておらず、24.7%は通ったが早々に学校を続けられなくなり、24.6%が通い続けて卒業しています。また、6.8%は一度も学校に通っていません。(Badil, et al., 2006年) 壁の東側に暮らすパレスチナ人は西岸地区に居住権を持ちながらも分離されており、学校の欠席や退学率は壁の西側に暮らす人びとよりも高いのです。

分離壁とそれに伴う体制によりパレスチナ人の大学生80%、小学校、中学校、高校の児童生徒の75.2%に対

し、学校や大学に通うために迂回道路を使用することを余儀なくさせています。おおよそ大学生の72.1%と小学生、中学生、高校生の69.4%がアクセスの問題で授業を欠席しています。また、エルサレムに暮らすパレスチナ人家庭の貧しい経済状況も出席率が低い原因の一つであり、移動に対して強化される規制は、パレスチナ人児童生徒の厳しい状況を明らかに悪化させており、教育や社会発展の権利を侵害しています。

・ エルサレムの路面電車システム

1999年にイスラエル政府が承認したエルサレム路面電車システムは、都市の交通量と混雑を緩和するため、環境的・経済的にも必要であると宣伝されてきました。ユダヤ人入植地と多くのパレスチナ人地域双方に役立つ交通システムであると広められてきました。しかし、このプロジェクトの本当の目的は明らかに東エルサレムの違法な入植地であるネベ・ヤコブ (Neve Ya'acov)、ピスガット・ゼブ (Pisgat Ze'ev)、フレンチヒル、マロット・ダフナ (Ma'alot Dafna)、そしてラモットと西エルサレムの都市中心部をつなげることであり、エルサレム市内および周辺のアラブ系パレスチナ人にとって社会的・経済的不利益となるものです。明らかに国際法に反するこのエルサレム路面電車システムは、パレスチナ人の土地の特性、人口構成、組織構造、状況を変えようとするイスラエル政府の試みにとって不可欠なものなのでしょう。このプロジェクトは、イスラエルの軍事占領、入植地政策、東エルサレムの違法併合を強固なものにしています。まず、このプロジェクトではパレスチナ人がエルサレムへのアクセスや西岸地区の北部と南部を移動するために使用する主要な幹線道路の1つである60号をまたいでいるにも関わらず、パレスチナ自治政府は路線のルート決定の話合いから排除されていました。(Passia, 2009年) 2つ目に、乗客になる可能性のある地域内のパレスチナ人は分離壁に阻まれ、路面電車を利用することができない。3つ目に、いくつかのパレスチナ人家庭は自分たちの所有地を路面電車のサービスに付随する駐車場や乗車場所のための「グリーンエリア」に指定され、土地を失いましたが、そのことに対するきちんとした補償もされていません。イスラエル政府はこれらの家庭に対し、土地をより有益な方法で活用できることの証明を要求しています。土地の取り上げを防ぐために店を作ったり、利益を出せる会社をはじめたり、家を建てるといったお金がないにもかかわらずです。路面電車システムの完成は、エルサレム市内と周辺のパレスチナ人をさらに路頭に迷わせ、所有物を奪い、社会の隅に追いやり、悪化の一途をたどるパレスチナ人の社会的・経済的地位に大きな影響を与えるでしょう。

・ 建築規制と家屋取り壊し

イスラエルの管理体制の下で生活するパレスチナ人にとって、建築許可を獲得することは非常に難しいことです。2007年、イスラエルの内務省と西エルサレム市は1万5,000軒から2万軒、あるいは東エルサレムの全建物の40%が必要な許可を得ずに建築していると発表しました。(Ir Amim, 2009年) 実に、許可を得てパレスチナ人が建築した全建物のうち、約10軒が正式な許可を得ずに建てているとイスラエル当局は宣言しています。(Margalit, 2007年) 建築許可の申請にかかる金額は大多数のパレスチナ人家庭には手が届きません。関連する費用に含まれるのは、申請、道路、歩道、土地開発、下水道開発、給水本管接続の費用です。(Margalit, 2007年) イスラエルの体制は、パレスチナ人が建築許可を得るにあたりもう一つ大きな障害を課しており、それはパレスチナ人が住居目的で使用できる土地を東エルサレムのほんの12%と計画していることです。さらに、この12%の地域はすでに開発済みであり、その多くはイスラエルの都市計画の中で公共建築物とされています。パレスチナ人は制度的に、ここ以外の地域へのアクセスが認められていません。

建物が「違法」とされると、その家の住人は多額の罰金か家屋取り壊し命令のいずれかの方法で罰せられます。前者はエルサレム自治体の主な収入源です。例えば2001年から2006年の間に1年間に約2,550万シェケルがパレスチナ人の「違法」建築により回収されています。(OCHA国際連合人道問題調整事務所, 2009年) 正式

な建築許可を得ていない東エルサレムのパレスチナ人によく使われるようになってきている方法は、家屋を取り壊し、3ヵ月から6ヵ月間収監する方法です。(Margalit、2007年)

エルサレムのパレスチナ住民に対してイスラエルがおこなっている政策で最も厳しいものは、ほぼ間違いなく家屋の取り壊しでしょう。1967年以来、イスラエル当局は東エルサレムの約2000軒のパレスチナ人家屋を取り壊しました。家屋破壊に反対するイスラエル委員会(Israeli Committee Against House Demolitions)によると、1994年から2008年の間に843軒が取り壊され、同時にエルサレム市内および周辺のパレスチナ住民に対し、約3000軒の取り壊し命令が出され、保留されています。(OCHA国際連合人道問題調整事務所、2009年) エルサレム市の予測では、人口の自然増加により1500戸の新たな住居がパレスチナ人地区で必要と言われるにも関わらず、2009年の初頭から東エルサレムでは1,052の取り壊し命令が出され、23軒が取り壊されました。(Ir Amim、2009年) 国際連合人道問題調整事務所(OCHA)の2009年5月の報告では、2003年から2007年の間にパレスチナ人による建築許可申請の数が2倍以上になっているにもかかわらず、28%以上の東エルサレムのアラブ人家屋は「違法」に建築されているため、取り壊しの被害に遭う可能性があるとして述べています。(OCHA国際連合人道問題調整事務所、2009年) イスラエルの政策と「ユダヤ化」は実に効果的に、パレスチナ人が正式な建築許可を獲得することを阻んでいます。

最後に、人種差別に基づいて構成されているイスラエルの政策や決定は、パレスチナ人の生活に欠かせないさまざまなレベルにおいて影響を与えています。

イスラエル占領体制はただ単に家族同士を引き離すだけではなく、地域を孤立させ、パレスチナ社会全体をばらばらにしています。封鎖、分離壁、基本的で重要な社会・経済・教育・医療サービス・支援システムへのアクセスからの遮断、建築許可の阻止、家屋の取り壊し等によるパレスチナ人地域の分断は、エルサレムのパレスチナ人の生活や発展にとって大きな障がいとなっています。また、これらの政策による計り知れない負担は女性や子どもを含めた一番の弱者が背負っているのです。

■調査方法■

この調査では、エルサレムのアラブ人地域のパレスチナ人たちの、さまざまな場で発せられる声を全面に出すことを心がけました。それは、止むことなく、時に目に見えず予測もできないイスラエルによる人種差別に対し、パレスチナ人たちがどのように沈黙や叫び、服従や抵抗、涙や笑い、運動、仲介者を利用して苦難を乗り越えているかを明らかにするためです。

また、ジェンダーに関する現実、空間、そして政治の接点を問いただすことを試み、“空間政治”については、エルサレムのアラブ地域におけるイスラエルの抑圧政策の基盤を検証しました。調査方法は、このほか、次の主な2つの思想に基づいています。まず1つ目は、エドワード・サイードによる(1978年)中東の人々の「他者」化の概念で、組織・言語・学問・形像・理論・法などを通して、この概念が国家の圧制の動きに重ね合わせられたとき、歴史を歪める目的でその概念が利用されているということです。2つ目は、さまざまなフェミニスト的アプローチで、これは「植民地主義からの解放」というテーマに含まれます。植民地主義からの解放のアプローチは次のような一般的な思い込みに対し、挑戦するものです；調査は「文化的影響」がなく、他のイデオロギーを受け入れず、研究者たちは高い道徳心をもって調査対象を研究し、中立な判断を下し、先入観が入る余地もない。植民地主義からの解放というアプローチは、被支配者、この研究では「被占領者」に注視することを念頭に置いて

います。(Smith、1999年) 植民地主義からの解放という手法は、サバルタン(従属的社会集団)の声を拾い、その声から学ぶことを心がける諸研究を生みだし、気づかれていない側面や、暗い部分に光をあてます。つまり、空間や場所の歴史、位置や所在地の政治、そして文化の考慮をどれも尊重して織り交ぜているのです。

これらの調査方法は、単純にエルサレムの男女の声を聞くことや、また、ある経験の説明を助け・補うための言葉や洞察が生み出す“安心感”を与えること以上のものが必然的に伴います。それは、潜在的な意味や直観的な知識を明らかにする以上のものが伴い、それだけでは、抑圧された人々の物質的な豊かさはほとんど改善されません。私たちの努力でトラウマをなくしたり、再発を防ぐことはできませんが、調査によって人々の意見や体験談を表に出し、権力の政治分析を導き出すことはできるでしょう。パレスチナの人々の過去と現在、彼らの話、彼らをめぐる地域や世界、彼らの空間や場所、コミュニティ、文化、言語、社会的慣行は、すべて周縁化された空間と言えるかもしれませんが、反面、抵抗と希望の空間にもなったのです。(Smith、1999年)

この研究は2009年5月から始まり、2009年12月に完了しました。この調査報告の執筆には、4名の調査アシスタントと、エルサレムYWCA専門家および運営チームのサポートが付きましました。総数42本のインタビューはパレスチナの若者に対しおこなわれ、内訳は18歳から28歳の男性22名と女性20名でした。そのうち22名は既婚者で(さらにそのうち)13名は子をもつ親でした。3本の追加インタビューは、子を持つ若いカップルに対しおこなわれました。

おこなったインタビューは利便性のよいもので、インタビューを受ける人たちの提案で、彼らが自由に語れる場所でおこないました。例えば、家庭内や美容院、インターネットカフェ、バス停や大学などです。すべてのインタビューは男女各1名から成る2名の調査アシスタントがおこない、インタビューを受ける人の承諾の上で記録されました。(3件のみ) インタビューに先立ち、参加者たちには経験をわかちあう意思があることを口頭または文書で確認し、その上でこの研究に参加していただいていることを言及しておきます。

調査は、村町、難民キャンプを含むエルサレムに隣接する5つの地政学的エリア内を網羅しました。

1. エルサレムの旧市街(9本のインタビュー)
2. シュアファット/アナタ難民キャンプ(8本のインタビュー)
3. シルワン(9本のインタビュー)
4. ベイト・ハニナ(8本のインタビュー)
5. シェイク・ジャラ(8本のインタビュー)

インタビューでは、以下の質問に答えていただきました。

1. エルサレムのパレスチナ人である、ということは、あなた個人にとってどのような意味がありますか？
2. 今日のエルサレム市民をめぐる最も重要な課題は何ですか？
3. エルサレムでの暮らしにまつわる、あなた自身や家族、友だちのエピソードを話してください。また、それはあなたに大きな影響を与えましたか？

■データ分析■

囚われの身、囚われた生活：民族浄化と排除という暴力

私たちは息もできず、八方ふさがりです。

マーワ 27歳、ベイト・ハニナ在住

この辺りでは、差別がひどいんです。彼らの狙いは私たちをここから追いだすこと、それだけです。でも、彼らの物でもない物を、奪い取るなんてさせません。例えばこんなことがありました。4年前、ユダヤ人の子どもたちに何だか深刻な問題が起きたんです。そうしたらある朝、私たちはその店の先にゴミが置かれているのを見つけました。それに、ドアと鍵穴は木板で塞がれていました。またある日は、何やらものすごい匂いと煙が店内に立ちこめていました。私たちは、再三警察にこのことを訴えたのに警察は何もしてくれませんでした。そこで、私が以前取材を受けたことがあったイスラエルのメディアと近所のアラブ人店主を連れてきて、写真付きで新聞にこの事件を掲載してもらいました。その後、この問題は少しはましになりました。でも、アラブ系の店への不買運動がひどくなり、私たちはへとへとで、街から追い出されそうです。もっとひどいのは、店を買収しようとする人が来るんです。そんな時私たちは、これはワクフの所有物なので、欲しいならワクフから買えといいます。

サミル 24歳、旧市街在住

これは私の弟の話です。私たち家族は全員エルサレムの身分証を持ち、すべてが順調でした。しかし、母が西岸地区のアルビラの病院で弟を出産したのです。弟は元々エルサレム出身であるとされ、西岸地区の身分証が発行されませんでした。その当時、私たち家族は山のような問題を抱えていて、弟にイスラエルの身分証番号を取得することもできませんでした。それから1年経って、いよいよ身分証を申請に行ったら、発行を拒否されました。係官は、申請書と証明書が必要だ、と私たちに言いました。これは家族の統合にかかわる問題です。私たちは、引き続きこの身分証の問題に立ち向かっていますが、イスラエル当局はどうしても弟に身分証を発行しません。これまでに法廷審問や法律にかかわる色々な問題に対処してきました。イスラエル内務省が家族統合の手続きを凍結したために、私たちはひたすら待たなくてはならないこともありました。想像してみてください。弟はもう18歳で、未だに身分証なしで生活しています。弟は路上でイスラエル当局に捕まったら、間違いなく拘留されます。弟は身分証なしでは軍事検問所も通過できず、どこへも行けません。弟が家族統合の申請書をもち歩いているのは、自分が拘束されてしまうのを恐れているからなんです。弟は世間から孤立しています。弟は言います、「僕は一体何者？学校へも行けない、結婚もできない、働くことも、何もできない。生きている意味がないじゃないか」と。弟のことで常に不安がつきまといます。母は弟を西岸地区の病院で出産したことを、父は弟の出生届をきちんと整えられなかったことを責めています。私たちは弁護士に全財産を投じましたが、何も解決できていません。

ナヒダ 25歳、シュアファット在住

5 エルサレムのムスリムの信託。旧市街の神殿の丘や自治区の管理などをする。

調査のためにおこなったこれらのインタビューで、エルサレム出身のパレスチナ人は、身体、日々の移動、そして行動が厳しい管理下におかれ、まさに「囚われている」というただならぬ思いを伝えています。彼らのこうした思いを理解するための理論分析には、次のことが要求されます。世界情勢と状況が、被占領地である東エルサレムでのパレスチナ人の毎日の生活の外郭を、どのように形成しているのかを完全に把握するために、私たちがグローバル化とポストコロニアル(植民地の時代以降)の理論を立てることで、世界情勢と状況には、「対テロ戦争」、一層の「安全保障の正当化」、政治・産業における恐怖の生産と暴力の拡散が含まれ、地域の情勢には国内避難民、地政学、そして家屋の破壊などが含まれます。地域情勢と世界情勢の相互作用を理解することは、エルサレムのパレスチナ人の日々の生活について語る多くの声に顕れている、権力の作用と物理学をめぐる情報を、私たちの思考と読解に与えてくれます。エルサレムで生活するパレスチナ人の声から学ぶことで、少数派集団として東エルサレムに生きる囚われの中にいるパレスチナ人とそのコミュニティは、単に支配され、制約され、排除されているばかりでなく、囚われの状態を生き抜き、抵抗しているのだということ、そのことへの理解を私たちが深められるよう期待します。インタビューを受けた人の大半は、パレスチナ人としての民族性とエルサレムのパレスチナ人であることの政治的アイデンティティが、排除と「八方塞がり」をもたらす分断の政治を助長したと語っています。引き続くトラウマ的な状況とパレスチナ人の減少に見てみぬふりをする国際社会によって支えられ、推し進められているイスラエルの抑圧構造の詳細について、彼らの多くが言及しています。イスラエルによるガザ攻撃(2008年末～2009年始)の後タイミングでおこなわれたデータ収集(インタビュー)は、イスラエルの国家的暴力からパレスチナ人を守る意思も能力もなかった国際社会に対する彼らの不信を、色濃く反映しています。あるインタビューの発言です。

世界は沈黙し、誰も立ちあがらない。根深いこの状況は一層悪化しています。特にガザで。ここにいる私たちは、いつだってエルサレムのユダヤ化と深く係わらせられています。彼らがやりたいように出来るようになっているんです。神のみぞ知るようなこの状況で、私たちに何ができるのでしょうか。

ガザの攻撃は、インタビューの内容に計り知れない影響を与えていました。表向き主に無気力感が語られましたが、働きかけと抵抗についても明らかになりました。私たちがおこなったどのインタビューにも、これはさまざまな形で現れました。例えば、「ガザで起きたことを見ればわかる」と語り始める人もいれば、ガザは正義と平等を拒否した国際社会がもたらした結果だと見る人もいます。また一方では、今後何をすべきか訊ね返す形でインタビューを終える人もいます。他には、「1948年のパレスチナ人の難民化以降、ディル・ヤシン、ジェニン、サブラ、シャティラ、そしてガザに対するイスラエルの攻撃があった。それでも世界はイスラエルを支えている」と結んだ人もいました。シェイク・ジャラでは、多くの人たちがインタビューを拒みました。(インタビューが拒否されたのはこの地域のみでした。その理由はおそらく、インタビューをしたこの時期に、大規模の強制退去や家屋破壊がおこなわれたためでしょう) 顕著だったのは、インタビューになぜ答える必要があるのかと、この地域の人々が口々に言ったことでした。それは、世界はガザでの残虐行為を見てみぬふりをしたのだから、シェイク・ジャラの家屋破壊や家族の強制退去など誰が気にかけるだろうか、という思いから出たものでした。ガザ攻撃、不正義に満たされた歴史、そしてエルサレムの状況が繋がっていることは、ほとんどのインタビューで明らかでした。

いくつかの回答では、ガザ攻撃を例に挙げて、イスラエルが世界やメディアをコントロールしているのではないかという恐怖感を語る人たちがいました。ある若い女性は、世界には、イスラエルにパレスチナの人々の虐待を止めさせる力はないと述べ、「イスラエルは、世界のさまざまな権力機関を管理下に置いています。その最たるものはメディアです」と付け加えました。さらに、数々の和平交渉の中で、パレスチナのリーダーたちが自分たち

の交渉の失敗と損失を理解していないことに対する、批判的なまなざしがありました。パレスチナのリーダーたちが人々の苦悩を十分汲まなかったという失敗は、人々の不安感を増長し、よりよい未来への希望を失わせ、「囚われの中で生きている」という感覚をますます大きくさせていると、ある一人の回答が示しています。

囚われている、または迫害を受けているという感覚は、ある既婚者カップルのインタビューにはっきりと現れています。夫は「私は、何をすることも人種差別の中で生きていると感じます」とイスラエルのスーパーマーケットで働いていたときのことを話してくれました。ユダヤ系従業員たちはさまざまな恩恵や値引きを受けていますが、パレスチナ人にはありません。また、たとえユダヤ系の従業員と同じ給料をもらっても、パレスチナ人は財政的な重圧や経済的ハンディキャップを課されます、と話しました。

まず、私は既婚で3人子どもがいます。家は賃貸で持ち家ではありません。アル・ラムに持ち家がありますが、私の身分証の制限、分離壁、封鎖、出勤で軍司検問所を通過するたびに受ける屈辱のため(家を離れ)、4年間その家を貸しています。こうした困難から、朝7時に家を出れば間に合う距離を、朝5時に出ています。

持ち家から賃貸の家へ引っ越したことは、どれだけの影響がありましたか？との質に彼はこう答えました。

まず、精神的な影響です。空っぽの家を見る今は敗北感でいっぱいです。なぜって、自分の家で生活できないのですから。2番目に、私の知人は皆旧家のまわりに住んでいます。つまりここには誰も知人がおらず、私は本当に追われたような気分になりました。

彼の妻が「誰も知人がおらず、打ち解けられずにいます。自分独りでいることにとっても嫌気がさしています」と付け加えた。これらは、いかにイスラエルの分断の政治がパレスチナの人々に住居を転々とさせ、移動のたびに経済的負担を強いるだけでなく、パレスチナの人々の社会的・心理的な強い繋がりを失わせるという負担を強いているのかを現しています。別の若い母親は、イスラエルの政策や彼女の家族、とりわけ2人の娘に対する暴力行為による影響を語ってくれました。

2ヶ月前、大変混乱し、恐怖に震えることが起こりました。夜中の3時に軍が家にやってきて、義理の弟を逮捕していきました。彼らはマスクを着用し、どんな風貌か確認できませんでした。家を完全に包囲され、気が狂ったようにドアをたたき始めました。私には2人の娘と1人息子がいて、彼らは義弟が連れられていくときに死ぬほどの恐怖で泣き叫びました。後に、軍がまたやってきて、その週に2度も、同じ時間に同じことが同じように繰り返され、その口実はいつも家の搜索でした。それ以来、娘たちは寝る時間になると泣き、明かりを消しドアを閉めるのを嫌がるようになり、どんな物音が聞こえても悲鳴を上げるようになりました。私たちは、とても苦しんでいる娘たちを精神科に診てもらおうかと考えています。

インタビューのおよそ半分は、パレスチナ人が軍事検問所や分離壁を通過して仕事に行くときに直面する困難を語るものでした。金銭面、時間、感情というエネルギーを移動のために注いでいるのです。28本のインタビューは、東エルサレムのパレスチナ人の日々の試練や厳しい財政状況、ビジネスの成功を阻むどうにもならない障壁、そしてその状況がパレスチナ人の職業の選択を狭め、イスラエルでイスラエルのために働くしかないことを語っています。

しかしながら、軍事・警察権力により管理された環境で、日々受ける屈辱を乗り越えるべく直面する精神的苦

難があるにも関わらず、インタビューの回答者たちは更に一生懸命働かなくてはならないということを口にしています。それは主に、イスラエル人やユダヤ人の雇用主に対して働くという意味で、職場で悪人扱いされたり嘲笑されたりすることに立ち向かうためでした。

回答者全員がさまざまな形で、イスラエルの軍事組織にいかにか自分たちの身体、時間、空間が管理されているかを語りました。たとえば、前述の家族は、エルサレムの居住権剥奪の恐怖から、仕方なく持家から賃貸へと引っ越しました。またある家族は、軍事検問所があるために、職場に定刻に到着するには通常より2時間も早く家を出なければならないことを明かしてくれました。

インタビューを受けた人々から、自分の家においてさえ、追放された気分であることが共有されました。これは、家族のつながりを断たれ、新しい拠点への移動の支援を失った者に、失望と屈辱、そして抑圧を与えます。ある若い男性は、「追放されるのは、軍司検問所に一日つつ立っていたり、自分とまったく無関係の人の家をぶんどくよう強制されるよりはまだよ。そんなことするやつは、どっちみち追放されるんだから」とこぼしました。

他の回答からは、パレスチナの人々がいかにか恐怖を感じながら、家に居ながら追放された感覚で暮らしているかということだけでなく、徹底的なイスラエルの人種差別により課される、絶え間なく予測不可能な困難が明らかになりました。ある既婚女性は、以下のように、人種差別と排斥が家族の生活の隅々まで行き渡っていることを語っています。

ある晩、私の下の子がビクル・コリムの病院に入院しなければならなかったときの事です。ユダヤ教正統派の看護師がやってきて、私の夫を病室から締め出しました。彼女は「あんたがここで寝るか、娘が寝るかどっちかだよ」と言い放ちました。ユダヤ人の父母と子は同じ病室にいたのに、なぜという思いです。

大きな影響を受けた体験を聞かせてくださいと訊ねると、別の女性が屈辱や心の痛みに対する深い思いを分かちあいました。

これは私の父に10年前におきた出来事です。道路で工作中、市の職員と一緒にいるときに、酒に酔ったユダヤ人女性に車ではねられました。父の怪我はひどく、病院にいかなくてはなりません。病院のミスで壊疽にならないような治療が何も施されず、父は壊疽になり、両足を切断しました。父は肢体が不自由になり(ここで彼女は泣き出しました)9年間寝たきりの状態になりました。そのユダヤ人女性は免許を6ヶ月間取り上げられただけでしたが、父には9年間何の補償もありませんでした。父が亡くなったその日、彼らは父を埋葬しているときに、(父は)100万シェケル(イスラエルの通貨単位)の補償を受けることができたのに、といました。しかし、父の死後、彼らは私たちにたった3万シェケルしか補償しませんでした。父が亡くなったというのに、その日私は父の住むエルサレム旧市街にどうにかたどり着けたというありさまでした。その日にちょうど封鎖があって、いくつもの軍事検問所を通過しなければならなかったからです。

彼女は無言になり、夫が続けました。「基本的にアラブ人はいつも蚊帳の外、部外者ってことなんだ。おれたちが死んだときにだけ彼らは見取りにくる」彼の妻は「私たちが死んだら彼らは会いにくるのかしら？」と反応しました。女性の話から、彼女の生活全体にパレスチナ人としてのアイデンティティがあらわれています。彼女は父親の話をつかちあひ、イスラエルの法制度がパレスチナ人に対して差別的で、彼女の父親の怪我の治療ミスが起こり、命を落としたことを語りました。彼女の父親の事故から、父親と家族に起きた長いこの惨劇、そして関連

する父親の死は、軍事化された居住区域で、大勢のパレスチナ人が苦難の日常を囚われの感覚で生きていることを浮き彫りにしています。

この章では、パレスチナの人々の声をさらに掘り下げていきます。次のように分類しました。

- ◇ 迫害と囚われの体験
- ◇ 経済的な囚われ
- ◇ 分断の政治
- ◇ 囚われた空間と場所
- ◇ 社会的支援ネットワークの崩壊
- ◇ 仲介者と抵抗
- ◇ ジェンダーをめぐる囚われと抵抗

これらの体験談は、日々の苦しみや迫害のみならず、人々が人生の困難を受け入れ、それが軍事化と構造的抑圧に立ち向かう原動力になっていることを教えてください。彼らが直面する日々の重圧、仲介者の介在・不在・限界を知ることは、パレスチナ人家族と男女ともに個人が長い支配の歴史を生き延び、生きてきた現実、そして苦しみを優先せざるをえない実情を理解する上で、有効な入り口となるでしょう。これらの話はまた、パレスチナの人々が彼らの必要や希望を一人の個人として、家族として、またコミュニティとして実現する方法を、どのように見つけたかを明らかにしてくれます。

1) 迫害と囚われの体験

最初の話は、私が幼稚園の頃の記憶です。幼稚園は家から近かったので、徒歩で通っていました。1989年頃のことです。ある日、兵士たちが路上に立っていました。彼らは私を捕まえ、仲間の中で私を突き飛ばしはじめました。私は揺さぶられ、しまいには足がすくんでしまいました。彼らが私を逃したのが信じられないくらいです。園に着くなり私が突然泣き出したので、先生は何かあったのかたずねました。それ以来、私は幼稚園に行くのがいやになり、家に閉じこもりました。軍はしばしば学校にもやってきて校内を荒らし、私は兵士が学校に現れるなり恐怖のあまりお漏らしをしました。私たちは通学を続け、成長し、ランディア(学校名)に行きました。軍人は私たちを挑発しつづけ、学校の正門で足止めしました。彼らは、法律により学校に入ることを許されていなかったのです。彼らは私たちの勉強の邪魔をし、やる気を喪失させました。私は入試を終え、アブ・デイスの大学に進学し、学生生活がしばらく続いています。その大学はイスラエルに認知されていないので将来が不安で仕方ありません。私たちは、生活のあらゆる面でイスラエルに振り回されています。

これは25歳の男性が語った体験です。男性はさらに続けてくれました。

私が高校生ごろ、試験の前日になると、よく屋外の木の下で勉強しました。兵士が私に近づいてきて、何をしているのかと聞きました。私が勉強していますと答えると、兵士は私の本を取り上げ、すわり込み、私を笑い飛ばしました。本と地面に投げつけました。私はワクブに苦情をいいましたが、彼らはただ私をイスラエル警察署に連れて行っただけでした。兵士は私をそっとしておいてくれず、私が公衆の目前で服を脱ぐまで本も返してくれませんでした。

6 エルサレムのムスリムの信託。旧市街の神殿の丘や自治区の管理などをする。

彼のインタビューから、勉強中に攻撃されつづけた体験と不安感が、職探し、友人や家族の訪問、教育へのアクセス、さらに病院で治療を受けに行くことなど、生活上のすべてに影響を及ぼしていることがわかります。東エルサレムに暮らすパレスチナ人が、常に不確実性と不安感を抱えていることは、旧市街に住む24歳女性の語りにも現われています。

私が一番怖いと思うのは、安全だと思えないということです。たとえば、私の家の屋根はとても高いのですが、旧市街や近隣で暴動など何かが起こると、まず軍が私の家へやってきます。何時であろうとおかまいなく、彼らはドアをノックし屋根に上がります。なぜならそこから広く見渡せるからです。私は、夜が来ると時々怖くなります。

他の村に住む、27歳の3人の子の母である既婚女性も、同じように不確実性と不安、囚われの感覚をインタビューで表しています。

イスラエルは本当の意味で、私たちの首を絞めたんですよ。私の兄(弟)が西岸地区の女性と結婚を考えたときのことです。彼は彼女といることでもとても苦しみました。二人が出かけるときには、兄(弟)は毎回、軍事検問所で屈辱を受け、拘束されました。弁護士に家族統合の件を取り扱ってもらうよう依頼をし、代金も支払いました。何が言いたいかというと、結婚、お金、家族、自宅さえ、イスラエルは奪うのです。要するに、私たちにはどこに住み、どこで働き、どこで学ぶといった自由さえありません。それが、囚われているということです。

同じ村に住む22歳男性は、次のように証言しています。

我が家の隣に叔父一家が住んでいます。叔父一家は、所有するビルを建築許可なく建てたという理由で、20万シェケルの罰金を課せられました。叔父一家には解体通知が送られ、解体期限までの時間的猶予がありません。彼らはこの件を公にし、控訴したところ、話がややこしくなりました。そのビルには12家族が住んでいますが、皆、他に行くところがありません。叔父一家はこのビルのために働き続け、全財産をつぎ込んできました。

叔父一家の姿を見てください。もはや誰とも言葉を交わさず、この一件で精神的にも経済的にも破壊され、夜も眠れません。また、今にもイスラエルが自分たちの家を破壊しにやってきて、家から追い出しにくるのではないかと完全に恐れています。神様、どうか助けてやってください。いとこの一人は恐れあまり、イスラエルが家を破壊した時の別の住み家として、シェイク・ジャラに家を買ったほどです。しかし状況は一転して、ビルに問題があるとのことで、イスラエルから警告が送られてきました。叔父は自分の労力とお金に対し、血の滲む思いでした。しかし、私たちに何ができますか？何の力もありません。私たちの悩みは、解決からほど遠いのです。

シェイク・ジャラに暮らす別の若い男性は、牢獄に住んでいるような感覚を話してくれました。

いつも誰かに狙われています。もはや顔をあげることもできず、自分を偽ってこの社会に合わせて生きていくしかできないように、誰かがずっと私を押しさえつけてつけているようです。常に監獄の中で生きている、皆が生きている普通の世界ではない、そんな感覚です。

生活のどの局面においても監禁されているような感覚は、若い女性の歴史教師の体験談にも現れています。学校の教科書さえイスラエルに管理されている、と彼女は語りました。

私が教師としてこの歴史を(このカリキュラムを追加して)教えるのは、禁止されています。とりわけエルサレムやパレスチナ国の歴史についてです。これは学ぶことを窮屈にし、また、歴史教育の軽視にほかなりません。

彼女の夫は、さらに深刻な懸念があると言い、彼女の議論を遮って語り始めました。彼は友人を亡くすことを最も恐れ、彼の言葉には迫害や恐怖に対する強い感覚が表れていました。

私が一番恐ろしいと思うのは、この町での暮らしがもはやまったく安全ではないということです。以前は友人がよく訪れ、私も会いに行くことがたびたびありました。もう暫く前のことになりますが、ある日彼が(旧市街の)ジャッファ門のところでユダヤ人に殺された、という事実を人伝えに聞かされました。あなたも彼の名前を聞いたことがあるでしょう、Amjad Abu Khederですよ。彼は、政治や国家主義思想などとは無縁だったのに、殺されたのです。ある人は、彼を殺したやつは何やら怒っていた、と言っていました。つまりこれは、家から一步も外へ出ないほうがよい、と考えはじめなさいということです。まるで私たちを自宅に故意に閉じ込めているかのようです。

囚われたような感覚「閉塞感」を、29歳の旧市街に住む母親のインタビューが証明しています。ユダヤ人の入植者たちが、彼女の家の近隣を占拠しつづけ、どことなく監視下に置かれているような気分で彼女や家族たちは生活しています。

少し前、私の息子が10歳のころ、家の外で遊んでいたら、ユダヤ人の入植者の子どもたちにいじめられました。そして、護衛が息子を殴りました。泣きながら帰宅し、私の夫とその兄弟たちは、外で何が起きたのかを見に行きました。彼らは外で20人以上のユダヤ人の護衛たちが待ち構えているのを確認しました。大喧嘩になりました。彼らは互いに殴りあい、私のいとこは足骨を折られ、夫は手の指の骨を砕かれました。護衛たちは、女性や子どもたちのことも殴りました。

護衛たちはそこから中から総出でやってきました。警察や救急車がやって来て、当然のように彼らは私たち家族全員を警察署に連行し、夕刻7時から明け方2時まで私たちを拘束しました。警察は私たちに尋問をし、屈辱的な思いをさせ、保証書に署名させ、護衛を殴り鼻骨を折ったことで私のいとこを起訴しました。また夫は法廷に連れて行かれ、自宅と近隣への2週間の出入り禁止を言い渡されました。夫を家や子どもたちから遠ざけ、万一彼が帰宅して近所にいようものなら即逮捕されてしまいます。

正当防衛の証明のため、私たちは彼らにCCTVの放送録画を見てほしいと頼みました。もちろん彼らは、数々の言い訳をするばかりで、CCTVの録画を見ませんでした。

私や子どもたちは恐怖と背中合わせに生活しています。私たちは常に入植者たちに囲まれ、いつでも攻撃されそうな勢いの中で、身を寄せて眠るのです。あなた方は信じないでしょう。私の一番下の息子は、護衛が喧嘩している間に、拳銃を抜き取り、壁に投げ捨てました。女の子も男の子も殴り合い、奇声を上げていました。

私たちはここに残って尊厳を守るか、死ぬか、ただそれだけです。彼らのやっていることには何の意味

もなく、私たちが守りに入る必要はそもそもないのです。

ユダヤ人の護衛たちにより、日常生活を監視下に置かれている体験は、エルサレム旧市街でのインタビューのすべての回答者から出されました。ユダヤ人入植者たちによるカメラの設置や盗聴のみならず、イスラエルの護衛たちが導入している、隠し撮りや盗聴に加えたあからさまな監視機器が、パレスチナ人たちの閉塞感を増強しています。シェイク・ジャラでのインタビューでも同じような感想が出ました。インタビューをした地域近隣の大勢の回答者たちは、イスラエルの国家安全保障政策に支えられた形で、ビデオ録画や会話がユダヤ人過激派に聞かれることへの恐怖を表しています。

旧市街とシェイク・ジャラでおこなった、2本を除いたすべてのインタビューが、パレスチナ自治政府はパレスチナ住民のために機能しておらず、人々の囚われた状況を悪化させているとコメントしています。次は、29歳のナディアさんの言葉です。

近所には私たち家族以外、誰も残っていません。住んでいるのはユダヤ人と私たちだけで、じきに私たちも離れなければならない時が来るでしょう。私たちは最低限の自分たちの安全のために、ジェリコに家を建て、ベイト・ハニナに土地を買いました。なぜならユダヤ人たちがやってきて、私たちを追い出し、誰も助けてくれないからです。つまり、誰が私たちを助けたいとなどと思うのでしょうか？イスラエル当局は家を取り上げたい、パレスチナ自治政府はお金のことしか考えていません。私たちはジェリコに行って戻って来たら、ユダヤ人たちが私たちの家に住み着いているのではないかと心配しています。

この章では、インタビューを受けた多くの人たちが、パレスチナ人としてのアイデンティティをめぐる政治が、日々の生活に影響していることを語りました。それは、子どもたちを外で遊ばせることに気が進まなかったり、自由な行動を抑制されたり、家族や友だちと密に連絡を取ることを阻まれたり、また、突然・理由もなく友人を亡くしたりすることについてでした。次の章では、経済的な囚われに焦点を当て、パレスチナの人々人が感じている、囚われたような感覚をじっくり見ていきます。

2) 経済的な囚われ

多くのインタビューにおいて、パレスチナ人の経験や経済的に囚われているという認識の影響が語られました。この章では、研究で収集されたさまざまな意見や体験談を引用し、エルサレムのパレスチナ人がどのように経済的な囚われを認識しているかを明らかにします。

次の体験談からは、家族の一人が収監されると、どのようにその家庭の経済的負担が増え、さらにはその家族のさまざまな権利の行使を妨げる可能性があるかを知ることができます。体験談を話してくれた25歳の男性には政治犯の兄(弟)がいます。収監による経済的負担の結果は家族全体に及び、男性は大学教育を継続することができなくなりました。

私の兄(弟)は20年の刑で刑務所に収監され、現在までに5年間服役しました。私への最初の直接的な影響は、一時期の間、大学に通えなくなったことでした。25年の刑を20年の刑に減刑するために、すべてのお金を弁護士への支払いにあてる必要があったからです。このようなケースに対応できる弁護士は、3万ドルを受け取るまで、話さえてくれないでしょう。

別のインタビューの回答者は、大学教育を修了できた者が直面する経済的な困難を明らかにしました。イスラエルが彼らの大学卒業資格を認定していないため、卒業生がエルサレムの労働市場において職を得ることを阻んでいるのです。インタビューの回答者の20歳の女性は、次のように話してくれました。

私を時折悩ませているのは、卒業後の就職先です。ご存じの通り、アブ・ディスの(アル・クドゥス)大学は(イスラエルに)認可されていません。

彼女の発言にほのめかされているように、パレスチナの大学教育は就職や経済的困難を乗り越えるために必ずしも必要ではありません。例えば、アブ・ディスのアル・クドゥス大学はイスラエル当局に認可されていません。エルサレムで合法的に就職するためにはイスラエルの法や規則を遵守しなければなりません。回答者の若い女性は、パレスチナの教育は、幼稚園の先生として求職する時でさえ、差別を受けやすいことを指摘しました。

私たちに対する最大の差別は教育にあります。私は11年間、幼稚園の教員をしており、デービッド・イェリン大学の教員養成課程への入学を申請しました。しかし却下され、認可されていないアブ・ディスの(アル・クドゥス)大学で私は学位を取得していたため、ゼロから出発しなければならないと告げられました。それは学位を持っていないかのような扱いでした。大学でユダヤ人の教員に出会い話をしていると、彼らは大学を卒業しておらず、職歴証明書しかもっていないことが判明しました。低いポジションへの志願さえ、このような扱いなのです。私たちがより高いポジションに志願した場合は想像にかたくありません。私たちは明らかに排除されています。

教育水準が低いユダヤ人女性でも、ユダヤ人という理由だけで、教育省で就職しやすいと、この女性は付け加えました。

別のインタビューの回答者の男性は、検査技師として地元の診療所の仕事に応募した経験を次のように話してくれました。「その診療所はイスラエルの教育機関を卒業している人々を優遇します。加えて、私たちはヘブライ語を話さないために、雇用機会がさらに低くなります」

経済的困難、とりわけ両親が就職できず家族を養えないと、家族関係や親としての役割認識に悪影響を及ぼすことが見受けられました。25歳の父親は次のように説明してくれました。

住まいのない路上生活者となるのが、明日は自分たちの番のように思えます。その上、私は失業中です。朝、私は子どもたちがまだ眠っている間に自宅を抜け出すようになりました。子どもたちが何かを欲しがり、お金がないことを伝えなければならないことを恥ずかしく思っているからです。そして子どもたちが眠りについてから自宅に戻ります。

(占領の)目標は、私たちを立ち退かせ、家から追いたて、路上に放り出すことです。イスラエルは、私たちが子どもを教育するためにお金を所有することさえ好ましく思っていない。

しかし、例えもし私たちの家屋が破壊されたとしても、路上生活して、ここに留まるでしょう。これは決意の固さや深い信念に関わる問題です。例えもし、この街の外に大邸宅を提供されたとしても、シルワンの村を離れることはないでしょう。私たちはここで生まれ、育ちました。私たちのルーツと土地はここにあります。イスラエルは突然やってきて、権利もなく移住し、私たちの権利を奪っていきます。

先述の引用は、パレスチナ人の経済的苦境の連鎖を示す多くの例の中の1つです。経済的苦境は家庭内に亀裂を生み、父親が家庭や子どもを置き去りにする原因となっています。それは、連鎖的影響がどのようなものであるかをも示しており、パレスチナ人が、自宅から追われるのではないかという恐れだけでなく、自分たちが「暮らすことが不可能」な状況にいることへの恐れも感じていることを明らかにしていました。

パレスチナ人の失業者や自営業者、イスラエル人に雇用される人々が直面している、経済的・精神的迫害を受けているという消せない認識は、(ユダヤ人とパレスチナ人という)2つの敵対的なグループの間の緊張を悪化させてきたことが分かりました。これらの緊張はさらに、パレスチナ人の就職の機会や仕事への自信を損ね、多くのユダヤ人雇用者のパレスチナ人の従業員に対する態度に影響を及ぼしていました。その例として、インタビュー回答者の23歳の男性は次のように説明してくれました。

私はかつてユダヤ人のために働いていました。毎週金曜日の礼拝時間には、いつも礼拝に行っており、ユダヤ人が妨げることはありませんでした。しかしある日、(私の上司は)行かせてくれませんでした。私は上司と喧嘩し、外へ出ました。(その後)上司は私を首にし、6カ月間自宅にいましたが、その間の補償は一切ありませんでした。

雇用されて、収入を得ることに加えて、この男性は宗教実践を通して、ムスリム系パレスチナ人としての自己アイデンティティの維持と発展を望んでいました。しかし、宗教の実践が雇用者との間に論争を引き起こし、男性が理性を失ったために仕事まで失いました。

26歳の男性は、薬科大学卒業後の研修先を探していた時のことを述べました。男性が直面した困難の多くは、エルサレムのパレスチナ人であるという事実が原因となっていました。男性は実家近くで働くことで、通勤費を節約することを望んでいました。男性の父親は失業しており、彼の姉(妹)はエンジニアとして就職できなかったために、男性の家庭の経済状況は厳しいものでした。

私は、ビクル・コリム病院に願書を送りました。病院は法律の規定がないにも関わらず、私が無給で就業するという契約書に署名することを条件に採用しました。それは、私の痛いところを突いていました。病院側は、働いてトレーニングを受けることを私がどれほど必要としているかを知っていたのです。

彼が用いた「痛いところを突かれている」という表現は、言い換えると体制の権力に支配されているということであり、経済・社会・精神的な影響は、他のインタビューにも見受けられます。イスラエルの職場で働いていたり、働いた経験のあるすべてのインタビューの回答者が、職場までの通勤の経済的負担や彼らが遭遇した日常的な屈辱や差別的発言、政策について話しました。また、自分たちに対するユダヤ人雇用者の恐れや不信、職場での孤立について取り組む必要性を話しました。かつてエルサレムのヘブライ大学で清掃員として働いたことのある若い女性は、次のように話してくれました。「一口ごとに、また一食ごとに、そして清掃員として稼いだ給与を使うたびに、痛みと苦しみが入り混じりました」

また、23件のインタビューでは、パレスチナ人の家庭に課されるイスラエルの家屋破壊政策が深刻な経済的負担となっていることが語られました。ある女性が次のような体験を語ってくれました。

イスラエルは裁判判決と破壊令を通知しました。私たちは、巨額の罰金が科されたので弁護士を雇いました。最初の罰金は80,000シェケルで、その支払が完了するなり、すぐにまた罰金を科されました。その時から今日まで、月賦払いで罰金を支払い続けています。まるで私たちの家は借家で、自分の家ではないかのようで

す。もちろん罰金は破壊令を無効にするものではありません。現在、私たちは地域整備をしようとしており、イスラエルは建築許可を与えることに同意してくれるでしょう。しかし、私たちへの屈辱的な対応は続いているわけで、今後何が起こるのかわかりません。とにかく、私たちがお金を支払い続ける限り、イスラエルは沈黙しています。冗談ではありません。

他の多くの回答者と同様にこの女性の言葉は、うまく仕組みられ、設計された人種差別的法令への洞察を与えてくれます。イスラエル当局と官僚はこの人種差別的法令を用いて、パレスチナ人が終わりのない経済的負担の陰で生きていかなければならないようにしています。この女性は、自分の家を所有していたのにも関わらず、約2,500ドルの罰金を3か月ごとに支払うことが要求されました。その合計額は、弁護士費用や自治体の施工技師への支払いをも合わせると家を借りるより高くなると付け加えました。さらに、これらの支払いにも関わらず家を失うかもしれないという恐れは、この女性や女性の家族の上に暗い影を落とし続けています。ある若い母親は、次のような体験談を語ってくれました。

イスラエルは私たちを包囲し、完全に生活が麻痺しています。公共の場所やあらゆる軍事検問所において、若い男性が逮捕され、侮辱を受け、屈辱を与えられています。私たちは、広々とした大きな家を追い出され、エルサレムの小さな部屋に押し込まれて、防犯カメラに囲まれました。また、支払い不可能な額の罰金やその他の費用が科されました。すべての人間が生きていくために授けられている生活を、イスラエルは破壊しています。

数人のインタビュー回答者は、給与と国民保険により支払われた保険金が、もっぱら罰金や弁護士費用、自分たちの家屋を破壊したブルドーザーの費用などに用いられていることを述べました。彼らの発言は、軍事経済より具体的にはパレスチナ人が占領に対して支払っている経済的費用についての真剣な研究の必要性を明らかにしています。

エルサレムのパレスチナ人家庭の経済状況は、家族の一員がエルサレム外で生まれたり、西岸地区やガザ地区出身の人と結婚したりする場合さらに悪化します。そのような場合、家族の中にエルサレムの身分証を所有するものと、そうでない家族がいることになります。インタビューで明らかにされたことは、エルサレムの身分証を所有していないと経済的負担を伴うということです。あるインタビューの回答者たちは、制約を受けずに職場や教育機関に通うため、西岸地区に家を賃貸せざるをえなかったと話しました。また別の回答者は、イスラエルの軍人に拘留されたり嫌がらせを受けたりすることなく、葬儀に参加するためにかかる旅費や、通院、出産、結婚祝いのために親族を訪問するのにかかる費用についての例を話してくれました。あるインタビューの回答者は、姉(妹)の結婚式での体験について語ってくれました。この男性は、エルサレムの身分証を持っていないのですが、男性の姉(妹)や他の家族はエルサレムの身分証を所有しています。結果的に、男性は結婚式に行く途中で逮捕されました。その夜、男性の釈放のために家族は2,000シェケル(約700ドル)を弁護士に支払わなければならませんでした。

別のインタビュー回答者は次のように話してくれました。母親はエルサレムの身分証を持っていますが、回答者の男性と姉(妹)はエルサレムの身分証を所有していません。

現在、私と姉(妹)が直面している問題は、毎年の居住許可の更新に行ってから、新しい許可書の発行に約4か月かかるということです。その間、私たちはエルサレムにいることを完全に禁じられています。私たちは、アブ・ディスのアル・クドゥス大学で学んでいるのですが、その間に何が起こるかが想像つくでしょうか？ 私は、

大学の友人と一緒にアブ・ディスに家を借り、私の姉(妹)も彼女の友人と一緒に別の家に住んでいます。そして私たちの母は一人で家に残ります。家族が一つの家に住むのではなく、別々の3戸の家に住んでいるわけです。さらに、母親は病気で、常に手伝いをする人が必要です。むしろ、私たちが海外にいるのであれば、母親に会いに戻ることができるでしょう。今の状況は、まるで完全な孤立です。

男性の話は、この家族が単に別々の3戸の家で暮らす費用を負担しなければならないだけでなく、電話代の支払いが大きくかさみ、言うまでもなく精神的な負担があることを示しています。別のインタビューの回答者は、パレスチナ人にとってエルサレムの旧市街に住むことは、ユダヤ人入植者と比較して費用がかかり、快適ではないと説明しました。ユダヤ人入植者はより広い空間や行政の優れたサービスを楽しみ、一般的に政府や市からの支援を受けています。男性は次のように話してくれました。

旧市街の中での生活そのものが、囚われです。私たちの状況をそこで暮らしているユダヤ人と比べると、少なくとも衛生面で、アラブ人地区はユダヤ人地区と異なることが分かります。ユダヤ人たちは素晴らしい施設を持っているのに対して、私たちの子どもが遊ぶ家の前は5メートルの幅もありません。一般に、人々はより良い暮らしをするために、たくさんのお金を支払いますが、エルサレムでは逆になっています。エルサレムのパレスチナ人は、より多くのお金を支払い、より劣悪な環境であらゆる圧力をかけられて生活しています。

すべてのインタビューで見受けられるように、経済的な閉塞感、いつも不安や恐れ、不公平感を伴ってきました。そのような感情は家屋の破壊の恐れがある場合に、さらに悪化しました。家屋が破壊され強制退去の対象となったシェイク・ジャラ出身のインタビューの回答者は次のように述べています。「一番強く恐れていることは路上に放り出され、自分の家を取りあげられてしまうことです。ここには、避難所や寝る場所もなく、路上に座りこんでいる人々を見かけます」

また次の体験談は、エルサレムで自分の家や土地を所有する経済的負担を明らかにしています。

一年前、3部屋増築しました。ユダヤ人がやってきて、建物を壊さない代わりに罰金を支払わされました。それは一時的な解決策でした。建物を破壊される代わりに、1万シエケル支払いました。また、許可証の申請のために支払いをしましたが、一向に許可証は届きませんでした。そして今なお、建物を壊されないように申請を更新し、申請のたびに支払いを続けています。

男性の妻は次のように付け加えました。

そして、イスラエルは私たちに7万7,000シエケルを支払わせました。その金額以上支払わないと、緑地を建造物に適した土地に変更するための土地改良許可証を求められます。それには50万シエケルを必要とし、また航空会社の航空の往来に影響を与えないことを示す書類の提出と、そのための別の許可が求められるのです。

3) 空間の政治: 囚われた空間と場所

研究では、イスラエルによる空間の政治が、エルサレムのパレスチナ人の閉塞感や息苦しさを高めてきたということが明らかにされました。

とりわけ、有害な政策はパレスチナ人を小さく、込み入った飛び地に「ゲットー化」したことでした。これはユダヤ人入植者の侵入や市内、都市間、近隣の村の間などのさまざまな移動制限に続いて行われました。インタビュー回答者はいくつかの体験談を話し、封鎖された空間の閉塞感を明らかにしました。

あるインタビューの回答者は、軍事検問所で列に並んで何時間も立っていたお年寄りを目撃したことについて話しました。そのお年寄りは突然地面に倒れ、息ができなくなりましたが、イスラエルの警察官は、立たないならば軍事検問所を通ることを許可しないと脅しました。別の女性の回答者は、軍事検問所を通る間、恐れから泣いて震えている女性を目撃した経験について述べました。

私は、かつて軍事検問所でセキュリティゲートを通るたびにブザーがなる女性がいたことを覚えています。何かがおかしかったのですが、イスラエル人はこの女性に何度もゲートをくぐらせ続けました。とうとう女性はとも動揺し、怯えていました。そして、その場にいたおよそ50人が叫び始め、女性は本当に興奮した様子でした。結局、イスラエル人は女性を通しましたが、私たちは機械のブザーを鳴らし続けていたのが、兵士であったことに気付いていました。

別のインタビューの回答者は、軍事検問所での経験について話しました。軍事検問所では、パレスチナ人は列になって立ち、遮るものもないところで、日中の熱気と日差しにさらされています。一方でイスラエル人兵士は、屋内で座りながら音楽を聴いたり、歌ったりしています。

ある時、軍事検問所は混雑し、すべての人々は列をつくって立ちながら待っていました。イスラエル人兵士はゲートを閉鎖し、誰も通しませんでした。兵士は電源が入ったマイクを持って、屋内で大きな声で歌い、大きな音をたててふざけ、日差しの中でゲートが開くのをおとなしく待っている人々を無視し続けました。

常時行われている旧市街の監視や監視カメラの威圧的な使用、その他隠しカメラや盗聴などの防犯装置については、インタビューで繰り返し取り上げられてきました。あるインタビューの回答者は次のような体験を話してくれました。

ちょうどこの真下の階の放置された部屋を、ユダヤ人が占拠しました。最初のうちは、問題ありませんでした。しかし、ユダヤ人は反対側にドアを取り付けることを望み、それにより上の階は不安定になりました。さらに、ユダヤ人は家を修復し、リビングルームを作り、そこでパーティを開きました。大騒ぎをし、音楽を流し、住民の間に摩擦や問題を引き起こしました。何かが起こると、ユダヤ人は2つある入り口を閉め、上から下からあらゆる方向にカメラを取り付けました。そして私たちがドアの前を通り過ぎただけで、ユダヤ人は歌い始め、挑発し、イスラエル国旗をも掲げました。

(旧市街の家々で)イスラエルの国旗が掲げているのを見た人は、旧市街の表向きやその歴史と裏腹の現状、さらにその家の内側にはイスラエルの国旗が掲げられまくっていることまで見抜くべきです。そして注意していただきたいことは、もし(パレスチナ人が)建物を修復したいのなら許可を得なければならず、許可されない可能性がほとんどだということです。ここに差別と、民族的優越主義があることは一目瞭然です。

パレスチナ人地区への攻撃やそれに伴う閉塞感は、生活拠点であるにも関わらず難民となっていると感じて

いる、若い男性の話に強く表れています。男性は軍事検問所での虐待を避ける唯一の方法は、両親から離れて生活することであり、またこのような負担により疎外感が深まり、受けることができる社会的な支援を諦めていると強調しました。同様に、パレスチナ人の家屋に対するイスラエルの攻撃が、その犠牲者の行動や生活に深刻な影響を及ぼしていることがわかりました。ある若い男性は次のように述べました。

私たちの家は、アル・ブスタンの家屋破壊令を通知された88戸のうちの19戸目でした。この状況がどのように私たちの生活に影響を及ぼしているか、想像できますか。前回、イスラエルが破壊令を送付してきたのは、私が中等学校に入学した時でした。一晩中勉強する代わりに、私は家が破壊されたらどうなるのだろうか、またどこへ行けばよいのだろうか、私の父に何が起こるのだろうかと考えながら、眠れず横になっていました。このことは、私の精神を狂わせ、身体以上に精神的に破壊されました。一旦何かが起こると、私たちの悲劇の本当の意味について、私はいつでも考えるのです。

私の弟は、学校に通っていました。破壊令が問題になった時、私の家は緊張につつまれ、悲鳴があがり、心配で眠れない夜が続きました。弟は学校に行くために朝起きると、通学用の鞆に自分のおもちゃを入れました。私の母親が弟に、なぜそのようなことをするのかと尋ねると、弟は母親に次のように言いました。「もし家に帰ってきて、ユダヤ人が家を壊していたら、おもちゃが家の下敷きになっちゃうよ。明日は新しい服も持っていきたいんだ。今日は鞆の中に入らなかったから」自分のことや自分の持ち物の心配をしている幼い少年が、何が起ころうとしているかを正しく理解せずにそのような行動を取っているのだとしたら、私たちは彼に一体何と言えればよいのでしょうか？

25歳の父親は、隣人の家屋が破壊された体験を次のように話してくれました。

最近アル・ブスタンでは、イスラエルが私たちの隣人の家屋を破壊しました。隣人は年をとっており、仕事をしていません。彼の妻は病気を患っており、7人の子どもがいます。家屋が破壊されてから1週間後、一家は壊された家屋の隣のテントにいました。私たちにも隣人と同様のことが起こりうるので、イスラエルが一家の家を破壊した時、私たち皆が心を痛めました。イスラエル人は大勢おり、彼らは武装しています。そして彼らは私たちを遠くへ立ち退かせ、家屋を壊すのです。隣人の家財が家の外へ捨てられたのをご覧になれば、あなたの心に正義がみなぎるでしょう。

パレスチナ人の家屋や空間への攻撃は多数の家屋破壊令が出されてきた場所において顕著です。18歳の男性は次のように説明しました。

私の家は発行された破壊令の家屋リストの39戸目にあたりました。2005年5月集団破壊令が、アル・ブスタンに通告されたため、私たちは裁判所へ出頭し、異議申し立てをしました。イスラエルは圧力を受けて、私たちが新しく増築しない限り、家屋破壊令を取り消す決定を下しました。私たちの過ちは、決定を書面で受け取っていなかったことです。

そして、2008年2月、再び家屋破壊令が88戸、約1,500人々の家庭に通知されました。私たちは大きな抗議テントを路上に作り、ジャーナリストや外交官、大使、指導者、お年寄りなど多くの人々が集まりました。そして再度の圧力を受けて、イスラエルは Beit-Hanina の Wadi-Adum の家屋を提供しました。それは西岸にあり、イスラエル側に一切の損失も出さずに私たちを立ち退かせることを目的としていました。もちろん私たちはそれを即座に拒否しました。

この状況全体は、とても大きな影響を私たちに与えました。絶えず緊張し、不安や恐れを感じ、自分の家で一言も発せない状況にあなたは耐えられるでしょうか。しかし率直に言って、よくよく状況を考えると、私たちが、イスラエルかしかいないのですから、何も恐れることはないことが分かります。私たちは、イスラエルがすることにいつも耐え続け、沈黙を守っています。イスラエルが私たちを追放することは不可能です。

近隣では椅子に座るといふ単純な行動も、もはや安全ではないと男性は付け加えました。

事件はシルワンよりすこし北で起こりました。この事件は私たちが暮らしている状況を幾度となく考えさせるでしょう。夜の9時頃、食料品店の店主が店のドア近くの椅子に座っていました。その時、店主がいた場所の地面が約4メートル陥没しました。店主は1週間病院に入院しました。これは、この地域で昼夜を問わず行われている(イスラエルによる)掘削が原因です。もはや座っていることさえ、安全ではありません。

若い女性は近隣の家の家屋破壊や立ち退き後、絶えず感じている恐れや不信感、閉塞感について以下のよう

に述べました。
もはやこの状況では何もあてにすることはできないでしょう。私たちは立ち退かされた家屋の近くにおり、ほとんど毎晩、入植者による家屋への攻撃があり、小競り合いやさまざまな闘争があります。このことは、幼い子どもたちを怖がらせ、子どもたちは私たちの家に逃げてきます。

4) 社会支援ネットワークの崩壊

インタビューでは、東エルサレムのパレスチナ人の生活を取り巻いている継続的で深刻な不信感と無力感が、「何をしても駄目である」といった失望感をどのように蔓延させているのかということが明らかになりました。インタビュー回答者数の約半数の20人は、空間的な暴力や国内において難民となっているという意識により、もはや自分の社会やコミュニティの支援ネットワークを頼ることができず、親しい友人や親戚ですらいつも信頼できないといった状態に置かれています。さらに、両親や、教員、裁判官、医者といった擁護者や支援者とみなされる人々と擁護されるべき人々の間で緊張が高まっています。多くのインタビュー回答者は、自分の親が危機の時に手助けしてくれなかったことや、イスラエルや入植者の攻撃、家屋破壊の際に親として自分の子どもに無力であったことについて触れました。別の回答者は、裁判官や裁判制度への不信感を述べました。あるインタビューの回答者は次のように話してくれました。

「裁判官や裁判制度は正義のためではなく、すべてイスラエルの利益のためにあります」

5人の大学生のインタビュー回答者は、兵士から屈辱を受ける教授たちを見て彼らの弱さを目の当たりにし、アドバイスやサポート、援助を求めるのに躊躇するようになったと話しました。

インタビュー回答者の28歳女性は、インフォーマルな社会システムや彼女の身近なサークルでの信頼の喪失を次のように説明しました。

西岸地区の身分証を所有しているという事実は、私の生活のあらゆる側面に大きな影響を及ぼしています。まず、私は夫と一緒に簡単に行き来ができません。それは、私が通常の越境ではなく軍事検問所を通らなければならないからです。このことは、私の移動が制限され、エルサレムに留まるしかないと意味します。また、西側の身分証を持っているため疑わしいと思われるのではないかと、隣人は私と話したくないのではないかと、さらには車に乗せたくないと思われているのではないかと感じるようになり、実際に社会的な関

係を損ないました。

さらに、この女性は自分自身のことを「迷惑な不法入国者」と表現し、隣人が自分と協力すると罪に問われると恐れているのではないかと感じていました。また、エルサレムで夫と暮らす西岸地区出身の女性の体験談は、女性が夫や夫の家族の負担になっていると感じた時、女性の立場が夫との関係にどのような影響を及ぼしてきたかを明らかにします。信頼の喪失や実家の家族を含む社会支援の喪失は、疎外感や絶望感を深め、今度は自ら移動や社会的関係を制約するようになったと女性は説明しました。「朝起きてベッドから出たり、子どもたちに学校の準備をさせるために目を覚ましたりしなくなりました。さらに、夫と一緒に座ってテレビを見たり、社会的な交流をしたくなくなる」ほど「私を完全に無気力にしました」

ある若い母親は、軍事化が家族のネットワークや関係にどのように負の影響を与えているかを述べました。

私と夫、子どもが親せきを訪問するためにイードからナブルスに向かっていた時のことを覚えています。子どもたちはとても興奮しており、一番よい服を着ておめかししていました。軍事検問所で、兵士は私たちを通すことを拒否しました。私たちは兵士と話をしようとしたが無駄に終わり、兵士は私たちを送り返しました。結局、私たちは親せきを訪問することはできませんでしたが、この出来事は子どもたちをがっかりさせ、動揺させました。私の一番下の息子でさえユダヤ人は通ることができたのに、なぜ私たちは通ることができなかったのかと尋ねました。兵士の目的は私たちを家に閉じ込め、家族や親せきから引き離すことなのです。

数人のインタビュー回答者は、深刻な不信感と恐怖がどのように社会的疎外感を深めてきたかを述べました。例えばある男性は、地元のパレスチナ人の情報提供者が(イスラエル当局に)協力していることへの強い絶望感を語りました。男性の話では、パレスチナ人、主に若者や失業者はイスラエルに要請されて、お金を受け取って他のパレスチナ人の情報を流したり、ユダヤ人入植者にパレスチナ人の家を売ったりして、占領に手を貸しています。人は、すべてのこと、すべての者に信用を失っています。このことがパレスチナ人を「互いに憎しみあわせて」きました。自爆攻撃の計画をした罪で告訴された仲間の大学生の逮捕のいきさつを、男性は次のように説明してくれました。

地元の人々にさえ敵意を持たれることがあります。以前、“ユダヤ人入植地の”マアレ・アドミムで、自爆攻撃にやってきたから殺ったと主張して、ユダヤ人があるパレスチナ人を殺害したことを覚えているでしょうか？その後、“パレスチナ”自治政府側は、私たちの大学の若い男子学生が、攻撃を実行しようとして殺害されたパレスチナ人を(入植地へ)送りこんだとして、その男子学生を刑務所に送りました。ようやく出所した時、男子学生の身体は麻痺していました。現在、彼は寝たきりで、少しも動くことができません。もし、私たちパレスチナ人が、ユダヤ人を手助けまでして自分たちの生活を破壊させたり、人々を殺害させたりしているなんてことがあったら、いったい私たちに残されているものはあるのでしょうか？私たちはもはや人々にも、世界にも、何も期待していません。

別の23歳の男性は、近隣のほとんどの家屋がユダヤ人入植者の手にわたるにつれ、無力感、嫌悪感、フラストレーションを感じるようになり、自分のコミュニティへの信頼を喪失したことを次のように述べました。

売ってもいない家をユダヤ人が奪ったと言う人々は間違っており、それはただのたわ言です。例えば、その家の住人が売っていないとしても、誰か他の者がユダヤ人に売っていることでしょう。これは私たちの責任であり、ユダヤ人のせいではありません。

24歳女性は、地元の指導者やコミュニティ、家族への批判とともに、近所の2つの家庭で起こった究極に身近なレベルの闘争について話し、外圧から生じる閉塞感だけでなく、内部にある閉塞感について発言しました。

近年とりわけこの地域は非常に難しい情勢の中にあり、私たちはその中で暮らしています。それは、ユダヤ人が私たちに対して容赦ないだけでなく、パレスチナ人同士も容赦なく、団結することが難しくなっています。一番大きな事件は、シルワンで約1か月前に起こった2つの家庭間の闘争です。ある日の新聞でユダヤ人が私たちを攻撃したとの掲載があり、その翌日の新聞ではパレスチナ人がお互いに殺し合っていると掲載されるというような、相反する状況を抱えています。

外部の政治的暴力、世界に蔓延する不公正、権利の否定、内部紛争等のコントロール不可能な状況の中で、インタビューの回答者は深刻な危機意識を伝えていました。この危機感の大部分は、誰を信用すべきで、誰を信用すべきでないか、自分や自分の家族を守るためにどのような手段をとるべきか、誰に相談し、どこで仕事を探せばよいか、そして自分の家を破壊され立ち退きを迫られた場合にどうすべきかといったことを決定する必要から生じています。

イスラエルによるエルサレムの軍事化がパレスチナの社会支援ネットワークに与えている影響の最後の例として、29歳の女性はユダヤ人入植者が近隣に侵出してきたことを語ってくれました。彼女が述べたことは、結果として物理的に排除されることになったこと以上に社会的な疎外感に関することです。女性の実家の家族は彼女を訪問することを恐れるようになり、彼女は自宅の庭であっても屋外で自分の子どもたちが遊ぶことをやめさせるようになったと説明しました。

私は結婚して、11年間この土地で快適に暮らしてきました。私たちの近くにはユダヤ人が住んでいる2つの家がありましたが、このユダヤ人のことを特に心配はしていませんでした。しかし今では、私たちはユダヤ人の家々に取り囲まれており、間違いなく強い精神的な影響や社会的影響を受けています。確かに精神的には、私たちは絶えず危険を感じています。ドアを開け放して座っていることや子どもたちが外に行ったり、子どもだけを家に残したりすることさえ安全ではないと感じています。また社会的には、私たちを取り囲む入植地の状況があるため、私たちを訪ねて来てくれていた人々が、自分の子どものことを心配するようになり、以前のように訪ねて来なくなりました。

5) 手段と抵抗

あるインタビューで、みずからの境遇を語る母親のかたわらに12歳の少年が座っていました。母親がユダヤ人入植者による迫害や謀略、とくにエルサレムの旧市街にある自宅を包囲されたことを話していると、少年が割って入り、ユダヤ人入植者たちは少年やその家族に暴行を加えたけれども、少年は彼らを恐れてはいないと話しました。

臆病者は僕たちではなく、あいつらだ。あいつらが僕たちの側を歩いていたとき、あいつらはびくびくしていた。僕たちのほうが、はるかに強いんだ。武器を持っていなければ、あいつらは僕たちに何もできないはず

だ。いさかいが始まった日には、僕たちはやつらに八つ当たりしたけど、お父さんがカメラを何台か買って家の周りを取り付けたので、何か起きたときには画像やビデオがあるんだ。だからあいつらは今、何もできないんだ。あいつらが僕たちに同情するのを待っている必要はないんだ。

ここで少年は手段と行動力を表現しました。そして彼自身とその家族は、生き残る方法のひとつとして自宅からの退去の受け入れを拒絶したのです。パレスチナ人が自身の無力を否定したこと、そして彼らの抵抗の意思は、別のひとりの若者がその家族の境遇を私たち語った言葉によっても明らかになりました。若者の家族はカロニアにある村落の出身で、そこを強制退去させられ難民生活となりました。彼自身とその家族が体験した惨禍と苦痛を踏まえて、彼は家族全員にインタビューを行い、その声を録音し CD におさめました。

私たちは、アブ・ゴシュの隣のカロニアと呼ばれる地域の出身です。1968 年にユダヤ人の武装した民兵がやって来て、そこに住んでいた私たちの家族は、生きるすべを一切持たずに、裸足のまま追い出されました。彼らは、私たちの家族を羊のように蹴り出し、その地域に入ってきました。こうして私たちの家族は、ここに来て、借家で暮らしてきたのです。大きくなってから私たちは、むかし家族が住んでいた場所を見に行いくようになりました。また、カロニアとそこから私たちが追い出されたことについての CD を作りました。そのコピーをお渡しします。

確かにそのインタビュー取材は最前線でのたくさんの出来事から構成されていました。そこに描かれたのは、病気の妊婦をエルサレムにいる医師に診せるためにヨルダン川西岸から密かに脱出させるのを助けた人たち、関わった人々の生命を賭した行動、そして故人の遺志を尊重して遺体を車に隠してエルサレムのバブ・アルスダット(Bab al-Sdat)のパレスチナ人墓地に葬った人々などの物語でした。単に、学校、大学、勤務先に到達するための日常的な闘いについて話したり、パレスチナ人としての日常生活の一部において屈辱を受容するのを拒んだことなども語っています。インタビューを受けたすべての人々がイスラエルの占領による権利の侵害に挑んだ自らの体験を語りました。専制と暴力に対する自身の抵抗を語って、それを生き延びるための日常的行動と表現した女性もいました。

私の夫は、お祈りのためにアル・アクサ寺院(モスク)に出掛けたまま予定の時間になっても戻りませんでした。住民の話ではイスラエル人入植者がアル・アクサを攻撃したため警察がゲートを全て封鎖し、誰も出入りさせていないということでした。入植者たちはいきり立った状況でした。警官は希望するものは誰でもアル・アクサを立ち去ることができる、ただしアル・アクサの外で起きたことには一切関与しないと人々に告げました。私は居ても立ってもいられず、夫を連れ戻すために行きたいと言いました。園芸用の小さな鍬を掴んで、夫のところに向かいました。しかし、神のご加護で何事もなく終わりました。この出来事はつまり、エルサレムの旧市街では、いつでも危害を加えられる可能性があること、何が起きるか分からないということの意味しています。

旧市街でのユダヤ人入植者による夫への脅威に対して、この女性は園芸用の鍬を握って警察と対峙しました。彼女は夫を取り戻すための辛い体験の詳細を説明し、入植者が彼女の家族を攻撃したときには、必要なことは何でもやると常に覚悟していると語りました。「イスラエルは大きな銃器を持ち、警官や兵士もおり、大きな勢力を持っています。…私は鍬を持っているだけですが、夫や子どもたちに近づいてきたらそれを使うつもりでした」

ある二十歳の女性は、自身の最も辛い体験を語りました。

ひとつの事件が本当に私を戦慄させました。ユダヤ人に対する私たちの恐怖をよく表していると感じました。インティファダが始まったとき、私の下の子は 10 歳くらいでした。母は、兵士が弟につきまったり、連れ去ったりするのを恐れて、女の子に見えるように弟に髪を長く伸ばさせました。石を投げつける子どもを兵士が探しにきたとき、女の子と思わせるためです。

このケースでは、エルサレムの旧市街で、ユダヤ人による攻撃に対する家族の日常的な恐怖が、母親に息子の髪を伸ばさせて女の子に見えるようにし、ユダヤ人入植者やイスラエル人兵士による攻撃から息子を守るという、斬新な方法を思いつかせました。

インタビュー取材のひとつで、自宅を守る、ただこの目的のために 37 年間に渡ってイスラエル当局と闘い、結局 2009 年の夏に立ち退きを余儀なくされた家族の一員である若い女性が、次のように語りました。

私たちは住居と敷地の問題に掛かり切りでした。1 年前に住居を増築したときの財政的な危機からまさに抜け出そうとしていた時でした。もう少しでラマダンというときに、彼らがやって来て父を 3 ヶ月間投獄しました。想像してみてください。それはイード(イスラム教の宗教的な祝日)のときでした。私はその事件で酷く心理的な影響を受けました。学校の成績さえ下がってしまいました。

父が出獄した後も彼らは私たち家族につきまとい、立ち退き命令を持ってやって来ました。立ち退きの日、私たちは夜遅くまで起きて外にいました。私と弟は、心の中で彼らがこちらに向かっていると感じていました。動く物音を聞いたのは朝の 3:30 頃でした。私たちは家に入り、ドアをロックしました。ほんの数秒の間に、彼らはドアと台所の窓のガラスを破りました。彼らは「出て来い」と叫びながら、やって来ました。着替える時間さえ与えてくれませんでした。私たちは寝間着のまま、裸足で追い出されました。出たくないと言ったので殴られました。何も持たせてくれませんでした。彼らは弟を殴り、シャツを破り、弟を放り出しました。そして私の小さな妹については、今でも彼らがどうやって妹を家から追い出したのか誰も分かりません。妹も未だにそれを話したがるらないのです…。

その日から現在に至るまで、私たちはその家の隣の舗道上に居続けているのです。戻れるという望みは捨てていませんが、路上で野宿しながら、ユダヤ人がその家に住んで、出入りするのを見るのは辛いことでした。けれども、私たちと隣近所の人たちや、ここに住んでいる人たち、特に私たちと同じ地域で立ち退かされた人たちとの間の関係は一層強くなりました。

この境遇が私の人生にそれなりに影響したのでしょうか、この問題を理解し、権利を守ることができるように、私は法律の勉強をしようと思い始めました。一方で、父と私はとても楽観的に家に戻れるだろうと考えていました。戻れないとしても、私たちが少なくとも自分の立場にこだわり続けて微動だにしなければ、脅威に晒されている他の家の立ち退きにプレッシャーを与えて、これを阻止できるのではないかと考えています。そして、話し忘れていましたが、妹は全てのイスラエル製品をボイコット中です。たとえ死ぬ間際であってもイスラエルのものは、どんなものであっても、食べることも、飲むこともしないでしょ。私たちはイスラエル人入植者の若者が、一方の手にユダヤ教の聖書トラーを抱え、もう一方の手に銃を持って私たちの家の屋根に居るのを見つけ、その若者を写真に撮って、インターネットに載せました。私たちは、また、多くの国際団

体に近づき、私たちがどれほど虐げられてきたか、あるいは私たちの問題について説明しました。神のご加護で、きっと良い方に運ぶでしょう。

前述の事例は、自宅に留まる権利に対する侵害と闘うための、さまざまな手段を明らかにしています。心の傷や痛手が、どれほど彼女やその家族に力を与え、彼女に人生を変える決断を促し、彼女の社会的支援のネットワークを強靱なものとしたかを語りました。また、これは、パレスチナの最前線での活動のひとつの形態として、また抵抗のための新たな武器として、インターネットを使用した方法の実例を示してもいます。

6) ジェンダー化された捕囚状態と抵抗活動

インタビューの分析によって明らかになった重要な研究成果の一つが、現行の政治的迫害、強制退去や強制移住、検問所でのイスラエル兵士との日常的な諍いや口論、男女の新しい出会いや交流の必要性、タクシー運転手への対応などを通して、ジェンダー化された政治的・社会的・あるいは経済的な行動に関して新しい場が開かれたことです。これらの状況は、パレスチナ人女性が新しい場に介入していく必要を生じさせました。その結果として、女性たちが自分たちの権利について交渉する、あるいは支援を求めてサービスの提供者を探すことを可能にし、それによって、女性たちの知識を広げ、生き残るための新しい方策を彼女たちに提供したのです。23歳の女子大学生が説明してくれました。

イスラエルの大きな目的は、(パレスチナの)女性と男性に対する統制力を増大させるために、(パレスチナの)男性により多くの圧力を加えることにありますが、それにまったく反する結果となっています。私は、これまでに増して多くの女性が大学に進学したり、公的なサービス分野で働いたり、あるいは起業しているかをお話できます。私の家族に限っても、伯父が失業したあと家計を助けるために伯母が苦勞して、パン菓子販売の新しい事業を始めました。そしてこのことは、宝石を作ってユダヤ人の店に卸すという事業を始めるきっかけを母に与えました。そして妹たちは全員、それぞれ高校を卒業して大学に在学するなど、自分たちの道を歩んでいます。イスラエルが私たちを抑圧し、攻撃すれば、それだけ私たちは一層抵抗するようになります。まだ苦難が続きますが、私たちは皆、高い精神を維持できる自分たちの能力に誇りを持っています。

しかし、女性に対するあるインタビューで、同じ家族のメンバーと一緒にいる場合を含めて、政治的迫害や強制退去、あるいは難民としての生活などが、暴力や虐待に対して彼女たちを一層脆弱にしていることも分かりました。エルサレムのパレスチナ人社会では、さらに女性が排斥されていることを問題にする女性もいます。女性が周囲に追いやられた状態を、地域のパレスチナ人指導者層が後押ししており、女性たちは日常的にジェンダーによる捕囚状態にあると語っています。エルサレム旧市街出身のある若い女性は、イスラエルによる地域分離政策やその他の地政学的・生物政治学的な要因が家族の経済的な困難を一層悲惨なものとし、それが結果としてパレスチナ人社会の内部でのジェンダー問題に悪影響を与え、女性のプライバシーや自由の抑圧につながっていると説明しました。

率直に言って、私たちがここで生活するために初めてやって来たとき、家があまりにも狭く、プライバシーも全く保てない状態だったので私は困惑しました。どの家も互いに接近していて、話し声は近所に筒抜けです。子どもたちの遊び場も全くありませんでした。私には、男の子と女の子がいます。[声をひそめて]義母は、もっと子どもを増やしたらと、しつこく言うのですが、いま私たちの家に十分なスペースはありません。エルサレムの外に家を借りることを何度も考えたのですが、居住権を失ってしまうことが怖かったのです。自宅や

借家を出て行く人間はいません。持っているお金で何とかやりくりして手に入れた家であればなおさらです。

その女性は、プライバシーが失われている幾つかの事例についても話してくれました。その出来事は、彼女が夫とベッドで就寝中に起きました。彼女の家にイスラエルの兵士が侵入したと、義母がドアを開け放って助けを求めたのです。彼女はまた、こんなことも話しました。彼女は、ひどい生理痛に悩まされていましたが、ベッドに横になったままではいられませんでした。夫の身内と一緒に生活では、彼女は常に監視状態におかれてしまうからです。彼女はさらに続けます。「妊娠や生理、婦人科の受診、あるいは脚の無駄毛の処理まで、女性特有の問題を始末するためには、泥棒のように息を殺して、内緒でやる必要があるのです。それが、本当に、本当に煩わしいのです」

他の女性たちへのインタビューでは、ヨルダン川西岸地区出身の配偶者や、西岸地区出身の親を持つ子どもたちに対する、エルサレムの身分証の発行拒否に象徴されるイスラエルの家族統合政策が、どれほどパレスチナ人の苦痛を深刻化させジェンダーの問題に悪影響を与えているかが語られました。インタビューを受けた男女はともに、エルサレムの身分証を保持し続けるためのやりくりに伴って経済的に困窮し、結果として経済的な独立性を失い、家族の援助に頼ってしまうと語りました。家族は、若い所帯に対しての支援元になるとみなされる一方で、インタビューを受けた何人かの女性は、家族からの支援は、女性の身体と生命に対する支配を強めてしまっているかと述べています。女性たちは、兄弟や伯父、男の従兄弟など地域の家父長制度の下での有力者によって支配されているという話をしました。ある若い女性は、彼女の父親の承諾を得て、伯父が9カ月に渡って彼女の給料のすべてを取り上げてしまったという事実を教えてくださいました。彼女は将来、伯父の力を借りる上での彼女とその家族の立場を失いたくないという理由で、父親の要請を受け入れるしか選択肢がなかったことを涙ながらに打ち明けました。彼女は続けました。

私は父が大好きで、父が家族の残りのメンバーから見下されているのを見るのは辛いです。父が、父の兄(弟)の医療費の支払いを支援しなかったら、私たちは一族の前で恥をかかなくてはなりません。(一方で)私の二人の兄(弟)は、金銭的な支援を拒んでいます。兄(弟)の一人には、それなりの理由がありました。彼の自宅が取り壊される可能性があり、それを逃れるための弁護士費用を支払っているからです。私は結婚を間近に控え、自分自身、給与を必要としていましたが、私は兄(弟)と違って、女です。男たちは、女の私よりもはるかに高い給料をもらっているが、必要なときには自分たちの給料を差し出すことなくあらゆる支援をあてにします。

ジェンダーに関する被害をめぐる女性への何件かのインタビューでも、婦人科を受診する、子どもを産むための安全な場所を見つける、あるいは健康問題を抱えている親類の女性を助けるなどの必要性についての議論がありました。ある若い女性は、彼女が最初の子どもを産んだときに医療の専門家から人種差別を受けた体験を話してくれました。

私はシャアレ・ゼデク病院で出産しました。最初、私は怖くもなかったし、心配もしていませんでしたが、その後、酷い人種差別を受け始めました。例えば、彼らに何かを頼んでも、彼らは私を怒鳴り散らして頼んだものを持ってきてくれませんでした。他の誰かが、頼んだときには、彼らは行儀よく、落ち着いて対応していました。退院する前には、彼らがユダヤ人の母親には出産祝いの贈り物をあげているところさえ目撃しました。アラブ人には何もくれなかったのに。二人目の子どもは、赤新月社病院で産みました。同胞であり、宗教も

同じですから、私に対して少なくとも彼らはよくしてくれました。ユダヤ人の病院にある設備を私たちが持っていたら、状況はもっと良かったはずですし、シャルル・ゼデク病院に頼る必要もないのですが。

この事例は、改めて四方八方を塞がれた状態にあるという女性の認識を示しています。この女性がイスラエルの病院で受けた処遇によって深く傷つけられたと感じている一方で、パレスチナの病院の医療機器や医療技術が標準以下であるため、多くのパレスチナ人女性がイスラエルの医療機関を頼ってパレスチナの病院を去っている現実があります。別の女性も、閉塞状態にあって、常に監視された状況下で生活しているという認識を語っています。

身動きができない状況、両親への訪問、検問所、子どもの安全に対するつきまとう心配、エルサレム旧市街で私たちを取り巻くように住み、私たちを窒息状態にしているユダヤ人入植者の監視カメラや警備員、仕事を失ったパレスチナ人の男たち、家族を養いたいという男たちの願い、子どものしつけさえできない、このような状況のはざままで私は行き詰っています。ごく普通の女である私は、結局、殴られたり、虐待されたり、完全に自尊心を奪われています…

検問所での女性に対する性差別的／精神的虐待やハラスメントなど、ジェンダーに基づいた囚われた状況の事例が他のいくつかのインタビューで見られました。検問所を通過する際に着衣を脱がせることが認められているイスラエル兵士によるハラスメントが女性たちの身体的高潔さを失わせ、一層の屈辱と苦痛を与えていると女性たちはますます感じるようになっていきます。ある女性が説明しました。

二度目のインティファダの際、ユダヤ人たちはギロの検問所に(通過するパレスチナ人の)所持品検査を行うためのテントを設営しました。いつも2時間、または3時間の検査をしました。(パレスチナ人)女性は部屋に入って(イスラエルの)女性兵士が検査をしますが、自信のない女性は逃れようとはしませんから、女性兵士によるセクシュアル・ハラスメントが散々に続きます。兵士たちは着衣を脱がせて検査をするはずですが、検査を断固としてさせないパレスチナ人女性もいて、(その場合)彼女たちは屈辱を受けるというより、何時間も立たされることになるのです。そして結局、兵士たちは女性たちを(通過させずに)自宅に送り帰すのです。

別のインタビューでは、若い母親が彼女の娘に対して抱いた、検問所をめぐる恐怖について語りました。

娘は成長すると大学進学を希望しました。私は検問所を通らなければ通えない大学には、なんとかしてでも行かせたくはありませんでした。以前、ベツレヘムの検問所で私の目の前で起こった事件のせいです。私はベツレヘムでの葬儀を済ませて、バスで自宅に向かっていました。バスには大学生たちが同乗していました。女学生の一人は大学での何かの活動で使ったロープを持っていました。とても綺麗な女性でした。雨が降っていて、私は兵士が彼女に厭らしい目線を送っていることに気が付きました。兵士はバスに乗り込んできて、ロープは誰のものか訊きました。彼女は、自分のものだと答えました。兵士は彼女をバスから降ろしました。私も彼女と一緒に降りました。彼女は恐怖で震え始めました。それほどの屈辱でしたから。兵士は彼女をそこへ残したまま運転手に出発するように言いました。兵士は私が彼女と一緒に居るのを認めず、怒鳴り始めました。彼女は恐怖で硬直していました。私は(なす術もなく)バスに戻りましたが、道中ずっと彼女のことが頭から離れず、運転手に後から来るバスに彼女を乗せるように言ってくれと頼みました。結局、後続のバ

スの運転手の一人が、何とか彼女を自宅まで送りました。そのとき以降、私は、たとえ娘が入学試験で100%の成績を収めても、検問所を通過しなければ通えないどの大学にも行かせるつもりはないと言っています。

この出来事は、軍政によるジェンダー問題がパレスチナ人女性に与える影響についての衝撃的な事例のひとつです。イスラエル兵士による若い女性へのハラスメントを直接体験したことと、その女性を守ることができなかったことへの罪悪感が、最終的にはインタビューを受けた女性の娘の教育を犠牲にする可能性を生みました。若い母親である別の女性は、イスラエル人に対する恐怖が彼女を精神的に追い詰めている気がすると話し、それがどのように妊娠中の彼女の友人を傷つけたかを語ってくれました。彼女は次のように話しました。

私たちは、誰に訴えたらよいのでしょうか？ 殺人鬼にでしょうか、それとも死刑執行人にでしょうか。イスラエル人たちは、必要などんな方法によってでも、私たちを追い出したいのです。彼らは面倒を見なくてすむように、私たちの数を減らしたいと思っています。私の友人は妊娠していました。妊娠6カ月で、ユダヤ人の医師は、赤ちゃんはダウン症だと彼女に告げました。医師は、大きな病気を持って誕生させてはいけない、中絶すべきだと言いました。彼女はすくんでしまい、赤ちゃんが生まれる前の数カ月間を不安の中で過ごしました。生まれた赤ちゃんは全く健康でした。どこにも悪いところはありませんでした。この出来事は、イスラエル人にとって私たちはひどく重荷になっていて、それがゆえにイスラエル人は、私たちを駆除したがつているようなものです。

彼女の友人がダウン症の胎児を妊娠していると医師の診断についての彼女の話は、イスラエル人が、産まれる前に中絶によってでもパレスチナ人を“駆除”しようとしているという彼女自身の確信によって形成されています。さらに子どもが健康で生を受けたという事実を取り上げて、彼女の分析を裏付けています。軍政の影響は、ある女性の次の証言からも明らかです。

前にも言ったように、私はエルサレム旧市街が嫌いです。旧市街に住む若い女性たちは不満だらけです。私を例にとっても、家族は私をとて信頼していて、私は、たいてい自分の好きなように(街を)行ったり来たりできますが、時間に遅れることは許されません。帰宅が遅れたら旧市街では災難です。旧市街は街灯が少なく、住民や麻薬中毒者は物騒で、軍隊さえいます。無傷でいるのは至難の業です。最近、帰宅してくつろぐという気分ではありません。監獄の中か、身分証(パスポート)をいちいち見せなければならない空港にいるような気がします。イスラエル人は、所持品検査の際に私の住所が旧市街であることを確認してから、(検問所の向こう側へ)初めて立ち入りを許可します。金曜日は他の日よりも店が早く閉まるので、旧市街は死んだようにさえなります。状況はどんどん惨めなものになります。

要するに、イスラエルの軍事政策によって女性たちが具体的な形で苦しめられ、イスラエルによる抑圧への抵抗のためにしばしば大きな対価を支払っていることが、インタビューを受けた男女それぞれの回答から明らかでした。攻撃を受けたり、身動きできない状態に置かれたり、時には周囲から迫害されたりしていると強く感じているにも関わらず、女性たちは、パレスチナ人社会への帰属と国への忠誠に関して深い認識を示し、正義を果てなく希求する意思を示しました。女性たちは、その家族やコミュニティを批判する一方で、パレスチナ社会の道徳規範に従うことも強調しました。この道徳規範は、抑圧の源泉となつていると同時に、イスラエルによる迫害に立ち向かうツールでもあるのです。男性も女性も、コミュニティ内でのジェンダーによる権力を、不確定な状況にお

けるトラウマに対する緩衝材とみなすようになってきています。ひとりの若い男性は次のように話していました。

エルサレムに居る私たちは、攻撃は私たちの家屋や土地だけでなく、私たちの家族や私たちの発展、さらには私たちの存在そのものに対してまで行われていることを非常によく理解しています。イスラエルの人種差別主義を克服する私の方法は、まず家族とガールフレンドを守ることです。全ての女性が勉学に励み、働き、そして健康であるように、私たちは女性たちを支援しなければならないと考えています。私の母を見ていると、政治的状況や、弟が投獄されたこと、あるいは祖母が何処に埋葬されたのかを母は知らされてさえいないという事実が、彼女の健康をどれほど損なっているかを理解できます。私は母を助けて、バブ・エルスバット (Bab el Sbat) のパレスチナ人墓地に小さな区画を設けて、母が祖母のための場所を持てたと感じることができ、ここに来れば祖母に祈りを捧げることができるようにしました。ここに住む近所の人たちはとても協力的です。可能な場合は、皆で互いに助け合います。誰かができないからといって、取り乱してしまうようなことは決してありません。旧市街の状況は困難を極めています。それ故に、私たちは皆で互いに協力し合うのです。子どもたちや若い女性がハラスメントや虐待を受けているのなら、私たちはいつでも油断せずに、下校時にどうやって彼らを守るか目を見張っています。私たちは、自分たち自身を誇りに思っています。

■結論および方策の提案■

この調査は、局地的あるいは全地球的にらせん状に広がる排他主義政策の影響に光をあて、エルサレムの軍政下におかれた区域で、この排他主義が、身動きできない肉体、生命、家族、コミュニティなどで溢れた閉塞的な現実をいかにして造り上げたかを明らかにしました。エルサレムにおいてらせん状に広がる閉塞状況と、それがパレスチナ人に対してもたらす犯罪行為ともいえる影響を分析すると、私たちがいくつかの理論的および方法的な課題を緊急に提起する必要があることが分かります。これらの課題は、パレスチナ人に対するケーススタディを踏まえて、いま直面している事態の重大性とフェミニズムの認識に基づくもので、植民地・軍事主義の日常性がエルサレムのパレスチナ人に及ぼす重大な影響に関係するものです。

研究を通して明らかになったことは、イスラエルの差別的隔離政策の影響下で、壁に囲まれゲットーのような分裂状態での生活をしていると、東エルサレムの大抵のパレスチナ人は、監獄の中で、心理的に傷つけられ、隔離され、分離されて生活しているという強い意識を持つようになるということでした。インタビューを受けた人々や、難民キャンプ、エルサレム近郊、村々の住民は、排除されているという深刻な認識とともに生活していることが分かりました。さらに、経済の衰退の影響に加えて、イスラエルによる排除、隔離、分離が、エルサレム在住のパレスチナ人のアイデンティティ意識や自己定義、国家意識、文化意識、コミュニティへの帰属意識などに特別な影響を与えています。特に分離壁は、両親と子どもたちを、母と娘を、そして兄弟姉妹を引き離して、家族の構成そのものに深刻な亀裂を生じさせていることが分かりました。

インタビューの回答者は、「閉塞状態」とでも言うべき彼らの意識を繰り返し語っています。この閉塞状態は、ハラスメント、虐待、トラウマ、エルサレムのパレスチナ人の日常生活を支配する力関係などが蜘蛛の巣状に絡み合った複雑な関係を、理論的に分析する際の中核をなすものと言えます。この認識は、排他と包含、帰属と排斥、支配力と無力状態などの人種差別主義の境界を理解する鍵になるものです。この「閉塞状態」の概念は、多重権力構造と力による秩序の維持が暴力の交差点を生み出し、結果として排他主義と暴力を再生してしまう状況

を理解し易くします。「閉塞状態」という概念は、権力による新たな秩序を形成するパワーだけでなく、支配され、閉塞下にある人々をエンパワーする回復と抵抗の湧き上がる力を理解するためにも用いられます。理論的分析の根拠となるのは、この調査でマハが「閉塞状態に置かれた生活」と形容した、彼女らの認識を語る大多数のパレスチナ人回答者の声です。

閉塞下で生活するという事は、明確な組織的規範が全く無い、まとまりの無い空間で生活することを意味します。実際に東エルサレムにおいては、多くの閉塞状況と捕囚状態におかれた多くの区域があることが分かっています。これらの区域は、自身の別個の道理を持つ一方で、他に依存する状態にもあって、特定の時間、区域、背景などのもとで常時不確定な条件で活動するときには、外部の道理に巻き込まれてしまう状況にあります。この閉塞下にある多くの区域を解放するためには、軍政下の被支配的地位のもとでの権力の仕組みを明るみに出し、日常における政治的関係を十分に監視しなければなりません。また、女性たちのジェンダーによる社会的、経済的な閉塞状況に十分な注意を払いながら、個々人がこの閉塞状況に挑む手段を検証することも必要です。

政治化された日常生活の上に立つイスラエルの軍事支配が、エルサレムのパレスチナ人に与える影響を追跡し、さらにパレスチナ人が受けている心的傷害や排斥について十分に理解し、この点に関するさらなるアドボカシーを支援するために、本調査は次の事項を提案します。

1. 政治的に、日常的に閉塞状況に置かれているという認識が、結婚式、葬儀、その他の家族的な行事への出席、病人の看護、誕生、通学、通院、経済的困難の克服など特定の日常的行動にどのように影響しているかをさらに調査して文書化する。また、地域内および国際的な政策立案者のこれらの問題への関心を高める。
2. 監視カメラの激増による旧市街に居住するパレスチナ人の常時監視、ユダヤ人入植者によるパレスチナ人への暴力、パレスチナ人地区に居住し、自由に行動でき、エルサレム市行政から優先的な取り扱いやより待遇の良いサービスを受けているユダヤ人入植者による、パレスチナ人居住区の占拠などによる心理的、社会的な影響をさらに調査して文書化する。また、地域内および国際的な政策立案者のこれらの問題への関心を高める。
3. パレスチナ人が過ごす時間に対するイスラエルによる侵害について調査する。時間は人間の成長において重要なパラメータであり、この調査でパレスチナ人の時間もイスラエルの軍事的支配と統制を受けており、その結果パレスチナ人の精神面での幸福と社会関係だけでなく、生産性や経済発展にも悪影響を与えていることが明らかになった。
4. エルサレムのパレスチナ人地区のユダヤ化と暴力の影響を調査し、文書化する。さらに、その情報を公的機関や人権団体に提供する。この調査でイスラエルの領土拡大政策や地政学的方針がエルサレムのパレスチナ人の生活の、心理社会的、経済的側面を大きく損なってきたことが明らかになった。
5. ガザ地区における最近の戦闘と、この戦闘に対する全地球的規模での否定などを含めて、進行中のパレスチナの占領や継続される歴史的不正などの状況下でのエルサレムについて調査する。世界が目撃して

いる中で起きたガザ地区に住むパレスチナ人に対する残酷な殺戮が、インタビューを受けた多くの人たちに絶望感を生じさせ、閉塞感を強めていることが分かった。同様に、その後の政治家の手によるパレスチナとイスラエル間の“和平”プロセスの復活は、パレスチナ人のトラウマや喪失感あるいは荒廃を無視したものだとして一般的に認識された。インタビューを受けた人々は、息苦しい(makhnooq)、息ができない(ma' atoo'), 取り囲まれている(mahawat)、完全に一人ぼっち(ma' atoo' min shajaarah: 文字通り木から切り落とす)、孤立した(ma' zool)など色々な言葉で表現したが、これらの言葉は、インタビューされた人々の閉塞感がコミュニティに根ざした支援戦略の展開にさらにエネルギーを投入することを要求していることを明らかにしている。コミュニティの状況を理解した上でこのような戦略に確固とした根拠を置くことは、軍事的な捕囚状態に向かい合っていく上でその戦略をより有効なものとする。

6. 恒常的に不確実で不安定な状況、終わることのない捕囚状態での日常、エルサレムでの生と死などから一人ひとりを保護するために如何なる方法が最善かという重大な問題を含めて、この調査で明らかにされていないパレスチナ人の生活における未調査部分について調査を行う。
7. 二つの段階で展開する効果的な予防戦略を構築する。第一段階は、捕囚状態の中で生きているエルサレムのパレスチナ人の中で支配的な意識についての知見を含めて、調査結果について若いパレスチナ人の自覚を高めることによって展開する。このような自覚は、不安や懸念の軽減を促し、体験を分かち合うことによってより大きな団結心を生み出し、捕囚状態にある現実に向かい合っていく上でのより効果的な手段を見出すためにパレスチナ人をエンパワーする。第二段階は、例えば、定期的な会報や機関誌などを通じて国内や国際的に影響力のある人たちにパレスチナ人の若い男女の声や辛い状況を知らせて、この調査結果についての注目度を高めることが望ましい。さらに、エルサレムのYWCAが年間200人近いパレスチナ人女性を教育し、学位や資格免許を与えている準教育機関の立場にあることを前提に、これらの女性たちが自分たち自身やその仲間のパレスチナ人に関するデータの収集に係わる機会を与えられることが望ましい。女性たちは、例えば、エルサレムのパレスチナ人の生活について年度毎に出版物を作成することによって自分たち自身の辛い境遇を分析でき、より深く理解することができる。この出版物はまた、現状の問題点に対して有意義な貢献ができると同時に、極めて制度的で教育的な成果をあげることができる。この基準で追跡調査を行うことには、次の利点がある。
 - (i) 若いパレスチナ人女性をエンパワーする。
 - (ii) 自身の体験について考え、評価し、共有するという貴重な機会を女性たちに与える。
 - (iii) 女性たちに日常的な困難に対処する上で、一人ではないという認識を与える。
 - (iv) 若い女性の視点から、女性たちに対する権利の侵害や残虐行為と併せて、エルサレムのパレスチナ人の日常的な体験やトラウマについての調査文書を生み出す。
 - (v) エルサレムに居住するパレスチナ人によって提供され、提案される新たな和解のための方策を設定する。

■ 參考資料 ■

- Abbas, N. (2003). "Abdo Nahla: Narrating the nation of Palestine," *Horizons: Women's News and Feminist Views*, 16(4), 18-22.
- Abdo, N. (2000). "Engendering Compensation: Making Refugee Women Count." Report submitted to the International Development Research Centre, from www.arts.mcgill.ca/mepp/new_prrn/reseach/papers/abdo
- Abdulhadi, R. (1998). "The Palestinian Women's Autonomous Movement: Emergence, dynamics, and challenges," *Gender and Society*, 12(6), 649-673.
- Antonius, S. (1979). "Fighting on Two Fronts: Conversations with Palestinian women," *Journal of Palestine Studies*, 31, 26-45.
- Antonovsky, A. (1983). "The Sense of Coherence: Development of a research instrument," *Newsletter and Research Report*, 1, 11-22. W. S. Schwartz Research Center for Behavioral Medicine, University of Tel Aviv.
- BADIL Resource Center for Palestinian Residency and Refugee Rights & The Norwegian Refugee Council/Internal Displacement Monitoring Centre (2006). *Displaced by the Wall: Pilot Study on Forced Displacement Caused by the Construction of the West Bank Wall and its Associated Regime in the Occupied Palestinian Territories*. Bethlehem, Palestine.
- BADIL Resource Center for Palestinian Residency and Refugee Rights (2007). *Survey of Palestinian Refugees and Internally Displaced Persons, 2006-2007*. Bethlehem, Palestine.
- Baker, A.M. and Kevorkian, N. (1995). "Differential Effects of Trauma on Spouses of Traumatized Households," *Journal of Traumatic Stress*, 8, 58-72.
- Baker, A.M. and Shalhoub-Kevorkian, N. (1999). "Effects of Political and Military Traumas on Children: The Palestinian case," *Clinical Psychology Review*, 19(8), 935-950.
- Barber, B. (2001). "Political Violence, Social Integration, and Youth Functioning: Palestinian youth from the Intifada," *Journal of Community Psychology*, 29(3), 259-280.
- Becker, D. (1995). "The Deficiency of the Concept of Post-Traumatic Stress Disorder when Dealing with Victims of Human Rights Violations." In Kleber, R.J., Figley, C.R. and Gersons, B.P.R. (eds.), *Beyond Trauma: Cultural and Societal Dynamics*. New York: Plenum Press, pp. 99-110.
- Boyden, J. (1994). "Children's Experience of Conflict-Related Emergencies: Some implications for relief policy and practice," *Disasters*, 18(3), 254-67.
- Boyden, J. and Gibbs, S. (1997). *Children of War: Responses to psycho-social distress in Cambodia*. Geneva: United Nations Research Institute for Social Development/International NGO Training and Resource Centre.
- Bracken, P., Giller, J. and Summerfield, D. (1995). "Psychological Response to War and Atrocity: The limitations of current concepts," *Social Science & Medicine*, 40(8), 1073-1082.
- El-Bushra, J. (2000). "Gender and Forced Migration: Editorial," *Forced Migration Review*, 9 (Gender and Displacement), 4-7. Oxford Refugee Studies Center, from <http://www.fmrevie.org>
- Freire, P. (1972). *La pedagogía del oprimido [Pedagogy of the Oppressed]*. Bogotá, Colombia: Tercer Mundo.
- Giacaman, R. and Johnson, P. (1989). "Palestinian Women: Building barricades and breaking barriers". In Ockman, Z. and Neinin, J. (eds.), *Intifada: The Palestinian Uprising Against Israeli Occupation*. Boston: South End Press, pp. 166-197.
- Goldsmith, R.E., Barlow, M.R. and Freyd, J.J. (2004). "Knowing and Not Knowing about Trauma: Implications for therapy," *Psycho Therapy: Theory, Research, Practice, Training*, 41, 448-463.
- Hasson, N. (2008). "Israel stripped thousands of Jerusalem Arabs of residency in 2008," *Haaretz*. Retrieved 13 January 2010,

from <http://www.haaretz.com/hansen/spages/1132170.html>

- Herman, J. (1992). *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books.
- Hernández, M.P. (2000). *A Personal Dimension of Human Rights Activism: Narratives of trauma, resilience and solidarity*. Unpublished doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Hernández, M.P. (2002). "Trauma in War and Political Persecution: Expanding the Concept," *American Journal of Orthopsychiatry*, 72(1), 16-25.
- Higgins, G.O. (1994). *Resilient Adults: Overcoming a cruel past*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Ir-Amim (2009). *A Layman's Guide to Home Demolitions*. Retrieved 13 January 2010, from <http://www.ir-amim.org.il>
- Jacobs, J., 1996. *Edge of Empire: Postcolonialism and the City*. London: Routledge.
- Jong, J. de (2002). Preface. In Jong, J. de (ed.), *Trauma, War and Violence: Public mental health in socio-cultural context*. New York: Plenum Publishers, pp. 1-92.
- Kagwanja, P.M. (1999). "Gender and Displacement: Ethnicity, gender and violence in Kenya," *Forced Migration Review*, 9, 22-25.
- Kimmerling, B. and Migdal, J.S. (2003). *The Palestinian People: A History*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Lifton, R.J. (1993). "From Hiroshima to Nazi Doctors: The evolution of psychoformative approaches to understanding traumatic stress syndromes." In Wilson, J.P. and Raphael, B. (eds.), *International Handbook of Traumatic Stress Syndromes*. New York: Plenum Press, pp. 11-23.
- Lira, E., Weinstein, E. and Salmovich, S. (1986). *El miedo: Un enfoque psicosocial [Fear: A psychosocial model]*. *Revista Chilena de Psicología*, 8, 51-56.
- Lira, E. (1988). "Efectos psicosociales de la represión en Chile" [Psychological Effects Of Repression in Chile], *Revista de Psicología de El Salvador*, 28, 143-152.
- Lykes, M.B. (1996). "Meaning Making in Contexts of Genocide and Silence." In Lykes, M.B., Banuazizi, A., Liem, R. and Morris, M. (eds.), *Myths about the Powerless Contesting Social Inequalities*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 159-178.
- Margalit, M. (2007). *No Place Like Home: House Demolitions in East Jerusalem, Israeli Coalition Against Housing Demolitions*, Israel.
- Martín-Baró, I. (1984). "Guerra y salud mental" [War and Mental Health], *Estudios Centroamericanos*, 39, 503-514.
- Martín-Baró, I. (1989). "Political Violence and War as Causes of Psychosocial Trauma in El Salvador," *International Journal of Mental Health*, 18, 3-20.
- Martín-Baró, I. (1994). *Writings for a Liberation Psychology*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Al-Mashat, K., Amundson, N.E, Buchanan, A. and Westwood, M. (2006). "Iraqi Children's War Experiences: The Psychological Impact of 'Operation Iraqi Freedom'," *International Journal for the Advancement of Counseling*, 28(2), 195- 211.
- Mbembe, A. (1992). "The Banality of Power and the Aesthetics of Vulgarity in the Postcolony," *Public Culture*, 4(2), 1-30.
- Mbembe, A. (2003). "Necropolitics," *Public Culture*, 15(1), 11-40.
- Miller, K.E., Omidian, P., Yaqubi, A., Quraishy, A.S., Naziry, M.N., Quraishy, N., Nasiry, S. and Karyar, N.M. (2006). "The Afghan Symptom Checklist: A culturally grounded approach to mental health assessment in a conflict zone," *American Journal of Orthopsychiatry*, 76, 423-433.
- Mohanram, R. (1999). *Black Body*. Minnesota: University of Minnesota Press. OCHA Special Focus (2009). *The Planning Crisis in East Jerusalem: Understanding the Phenomenon of "Illegal" Construction*. Retrieved 13 January 2010, from http://www.ochaopt.org/documents/ocha_opt_planning_crisis_east_jerusalem_april_2009_english.pdf
- PASSIA (2009). *Jerusalem Israeli Settlement Activities & Related Policies*. Retrieved 13 January 2010, from

- Razack, S. (ed.) (2002). *Race, Space and the Law: Unmapping a white settler society*. Toronto: Between the Lines.
- Said, E. (1978). *Orientalism*. New York: Pantheon.
- Sayigh, R. (1979). *Palestinian from Peasant to Revolutionary*. London: Zed Books.
- Sayigh, R. (1996). "Palestinian Refugees in Lebanon," *FOFOGNET Digest*, 28th June-3rd July.
- Sayigh, R. (1998). "Palestinian Camp Women as Tellers of History," *Journal of Palestine Studies*, 27(2), 42-58.
- Scott, J. (1985). *Weapons of the Weak*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Shalhoub-Kevorkian, N. (2003). "Liberating Voices: The political implications of Palestinian mothers narrating their loss," *Women's Studies International Forum*, 26(5), 391-407.
- Shalhoub-Kevorkian, N. (2004). "The Hidden Casualties of War: Palestinian Women and the Second Intifada," *Indigenous Peoples' Journal of Law, Culture & Resistance*, 1(1), 67-82.
- Shalhoub-Kevorkian, N. (2006). "Negotiating the Present, Historicizing the Future: Palestinian children speak about the Israeli separation wall," *American Behavioral Scientist Journal*, 49(8), 1101-1134.
- Shalhoub-Kevorkian, N. (2008). "The Gendered Nature of Education under Siege: A Palestinian feminist perspective," *International Journal of Lifelong Education*, 27(2), 179-200.
- Shalhoub-Kevorkian, N. and Khsheiboun, S. (2009). "Forbidden Voices: Palestinian Women Facing the Israeli Policy of House Demolition," *Women's Studies International Forum*, 32(5), 354-362.
- Shalhoub-Kevorkian, N. (2009). *Militarization and Violence against Women in Conflict Zones: A Palestinian case-study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, L.T. (1999). *Decolonizing Methodologies: Research and Indigenous Peoples*. New York: St. Martins Press.
- Summerfield, D. (2001). "The Nature of Conflict and the Implications for Appropriate Psychosocial Responses." In Loughry, M. and Ager, A. (eds.), *The Refugee Experience—Psychosocial training module Vol. 1*. Oxford, UK: Refugee Studies Centre, pp. 28-56.
- Summerfield, D. (2001). "The Invention of Post-Traumatic Stress Disorder and the Social Usefulness of a Psychiatric Category," *British Medical Journal*, 322, 95- 98.
- Swartz, L., and Levett, A. (1989). "Political Repression and Children in South Africa: The social construction of damaging effects," *Social Science and Medicine*, 23(7), 741-50.
- Ullman, S.E. (1996). "Social Reactions, Coping Strategies, and Self-Blame Attributions in Adjustment to Sexual Assault," *Psychology of Women Quarterly*, 20, 505-526.
- Van der Kolk, B.A., McFarlane, A. and Weisaeth, L. (1996). *Traumatic Stress*. New York: Guilford Press.
- Waller, I. (1996). "Victims of Crime: Justice, support and public safety." In Danieli, Y., Rodley, N.S. and Weisaeth, L. (eds.), *International Responses to Traumatic Stress*. New York: Baywood, pp. 81-129.
- Welsh, J. (1996). "Violations of Human Rights: Traumatic stress and the role of NGOs." In Danieli, Y., Rodley, N.S. and Weisaeth, L. (eds.), *International Responses to Traumatic Stress*. New York: Baywood, pp. 131-159.
- Yap, M.B.H. and Devilly, G.J. (2004). "The Role of Perceived Social Support in Crime Victimization," *Clinical Psychology Review*, 24, 1-14.
- Zackariya, F. and Shanmugaratnam, N. (2002). *Stepping Out: Women surviving amidst displacement and deprivation in Sri Lanka*. Muslim Women's Research and Action Forum, Colombo, Sri Lanka.

**Military Occupation, Trauma and the Violence of Exclusion:
Trapped Bodies and Lives**

2010年3月 発行

YWCA of Palestine

Sheikh Jarrah, Ibn Jubeir St.

P.O.Box 20044 Jerusalem

Tel: +972-2-6282593

Fax: +972-2-6282082

E-mail: admin-jerywca@alqudsnet.com

www.ywca-palestine.org

翻訳版 「囚われの身、囚われた生活
非占領地パレスチナにおける、軍事占領、トラウマ、排除という暴力」

2012年3月 発行

翻訳協力 植田加奈・後藤幸男・春井多美恵・ほか

編集・発行 **日本 YWCA**

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

東京 YWCA 会館 302 号室

Tel: 03-3292-6121 Fax: 03-3292-6122

E-mail: office-japan@ywca.or.jp

<http://www.ywca.or.jp/>